

2013 年度

コミュニケーションパートナー
育成支援事業報告書

NPO法人言語発達障害研究会

2013 年度

コミュニケーションパートナー
育成支援事業報告書

NPO法人言語発達障害研究会

2013 年度

コミュニケーションパートナー育成支援事業報告書

目次

1. 事業の概要	3
(1) コミュニケーションパートナー育成支援事業とは	4
(2) 事業の目的	4
(3) 実施事業	5
2. コミュニケーションの状況とニーズに関する実態調査結果（アンケート調査）	7
－放課後等デイサービス・放課後支援を含む余暇支援，移動支援，レスパイトケアにおける コミュニケーションに関する実態調査の実施－	
(1) 目的	8
(2) 調査方法	8
(3) 結果	8
3. セミナー 放課後や休日のコミュニケーションを豊かにするために	19
(1) セミナー開催概要	20
(2) 講演会内容	22
<hr/>	
コミュニケーションパートナーとは？ 佐竹恒夫	22
発達障害児とのコミュニケーション －発達段階を踏まえて－ 倉井成子	24
自閉症スペクトラムの人とのコミュニケーション 梶縄広輝	33
肢体不自由児とのコミュニケーションの工夫 知念洋美	42
<hr/>	
(3) セミナーのまとめ	47
4. 相談会	53
(1) 相談会概要	54
(2) 相談会のアンケート結果	56
(3) 相談会のまとめ	56
5. 成果等のまとめと今後の課題	57
資料：アンケート調査原紙・セミナーチラシ	59

1

事業の概要

(1) コミュニケーションパートナー育成支援事業とは

近年、言語発達障害^{注1}児者の社会参加を促す放課後等デイサービス・放課後支援を含む余暇支援や移動支援、ならびに家族支援であるレスパイトケアを目的としたサービスは全国に広がっている。しかし、言語発達障害児者に適したコミュニケーションの取り方や予告の仕方、パニック時の対応などができるスタッフの養成は不十分な現状である。さらに東日本大震災から2年を過ぎ、福島県では特別支援学校の生徒が増加するなど支援を必要とする子どもや家族が増えている一方、支援者は不足しており、支援者への支援は急務である。

私たちは2012年度、言語発達障害児者と適切なコミュニケーションを取ることができるようになるために、支援者に対して情報提供する「コミュニケーションパートナー支援セミナー」を東京で開催した。言語発達障害児者を支援するスタッフには障害特性にあった適切なコミュニケーションの取り方などを伝え、家族には（スタッフに伝えるための）サポートブックの作り方や使用方法の情報を提供することができた。

このたび、平成25年度独立行政法人福祉医療機構からの助成により、今年度はコミュニケーションパートナーを育成し支援する活動を広げることとした。また福島県言語聴覚士会の全面的な協力も得ることができ、全国的な実態調査ならびに「コミュニケーションパートナー育成支援セミナー」を福島県にて開催することができた。

これらの活動により、言語発達障害児者の社会参加の充実や家族支援につながり、地域で安定した生活を送ることに貢献したいと考えた。さらにコミュニケーションパートナーへの支援を通じて、東日本大震災からの復興に少しでも寄与できればと考えている。

(2) 事業の目的

- ①知的障害、発達障害、脳性麻痺など言語発達障害児者の家族、および日常生活で支援に携わる方々を「コミュニケーションパートナー」と位置づけ、言語発達障害児者とコミュニケーションパートナーが、相互に適切なコミュニケーションを取ることが可能となることを目的としている。特に放課後等デイサービスを含む余暇支援、移動支援、レスパイトケアなどに携わるスタッフを中心に養成する。
- ②福島県言語聴覚士会との協力のもと福島県にてセミナーを開催し、コミュニケーションパートナーへの支援を通じて東日本大震災の被災地の復興に寄与する。

【言語発達障害研究会について】

特定非営利活動(NPO)法人言語発達障害研究会は、言語・コミュニケーションに障害のある方やご家族などへの支援を行う言語聴覚士、指導員や保育士などの児童福祉施設職員、特別支援教育に携わる教諭など専門家からなる団体である。1984年に言語発達遅滞研究会として活動を開始し、言語発達障害児者に対する言語・コミュニケーション支援の質を高めるための活動一定例研究会や各種講習会、検査法や療育・訓練プログラムなどの開発等一を行ってきた。2008年5月に特定非営利活動(NPO)法人となり、2009年度からは、障害のあるお子さんとご家族のために「家族支援セミナー」として講演会や個別相談会を毎年開催し多くの方にご参加いただいていた。

注1 「言語発達障害児者」とは知的障害、発達障害、脳性麻痺など言語やコミュニケーションに障害のある人を示す。

(3) 実施事業

事業内容は以下の通りである。

1. 実行委員会の開催
2. 放課後等デイサービス・放課後支援を含む余暇支援，移動支援，レスパイトケアにおけるコミュニケーションに関する実態調査（アンケート調査）
3. 「コミュニケーションパートナー育成支援セミナー」の開催
4. 報告書の作成と配布

I. 実行委員会の開催

- ①設置目的：事業実施にかかる課題の把握，整理，検討および事業の進捗管理
- ②委員構成：13名，理事および会員（福島県言語聴覚士会会員1名を含む）
- ③開催実績：表1に示す。

表1 実行委員会開催実績

開催回	年月日	会場	参加人数
第1回	2013年6月8日	横浜	9名
第2回	2013年7月13日	横浜	11名
第3回	2013年7月25日	東京	10名
第4回	2013年9月7日	東京	10名
第5回	2013年9月21日	横浜	8名
第6回	2013年10月19日	横浜	7名
第7回	2013年11月8日	東京	9名
第8回	2013年12月7日	横浜	9名
第9回	2013年12月14日	東京	7名
第10回	2014年1月11日	横浜	10名
第11回	2014年2月1日	横浜	8名
第12回	2014年2月22日	横浜	8名
第13回	2014年3月8日	横浜	9名

II. 放課後等デイサービス・放課後支援を含む余暇支援，移動支援，レスパイトケアにおけるコミュニケーションに関する実態調査（アンケート調査）

- ①目的：言語発達障害児者のコミュニケーションパートナーについての実態を把握する。
- ②内容：余暇支援，移動支援，レスパイトケアなどの場でのコミュニケーションについての現状と課題について
- ③調査時期：2013年11～12月
- ④調査対象：言語発達障害研究会会員，余暇支援，移動支援，レスパイトケアに携わるスタッフ，学校
- ⑤方法：記入式アンケートを，Ⅲ. のセミナー案内に同封し送付。
- ⑥調査結果の活用方法：講演会の内容に反映させるとともに，報告書に調査結果を掲載する。

Ⅲ. 「コミュニケーションパートナー育成支援セミナー」の開催

- ①名称：コミュニケーションパートナー育成支援セミナー「放課後や休日のコミュニケーションを豊かにするために in 福島」
- ②目的：言語発達障害コミュニケーションパートナーへ、ことばの発達やコミュニケーションの取り方・関わり方の工夫を伝え、言語発達障害児者との円滑なコミュニケーションの成立に生かしてもらう。言語発達障害児者の家族にはスタッフへの伝え方を学んでいただく。
- ②開催時期：平成 26 年 1 月 19 日（日）
- ③場所：総合南東北病院（福島県郡山市）
- ④参加者：言語発達障害コミュニケーションパートナー（余暇支援，移動支援，レスパイトケアに携わるスタッフ，言語発達障害児者のご家族，言語聴覚士，特別支援教育教員等）計 176 名
- ⑤参加費：無料
- ⑥広報方法：チラシを 10,000 部，ポスターを 5,000 部作成し配布した。配布先は表 2 のとおり。
- ⑦後援：福島県言語聴覚士会，福島県，郡山市，郡山市教育委員会

表 2 セミナー案内配布先一覧

配布先	数
言語発達障害研究会関連（会員、研修会参加者等）	1,732
児童発達支援関連事業所（東北 4 県、関東の都県・政令指定都市）	511
特別支援学校、特別支援学級、通級教室（東北 4 県および関東 1 都 6 県）	2,200
親の会・当事者団体	27
福島県言語聴覚士会会員	65
言語聴覚士養成校	72
計	4,607

Ⅳ. 報告書の作成と配布

- ①題名：「2013 年度コミュニケーションパートナー育成支援事業報告書」
- ②印刷部数：A4 版 66 ページ 500 部
- ③配布先：言語発達障害研究会会員，セミナー参加者，後援団体，コミュニケーションに関する実態調査にご協力いただいた事業所
- ④言語発達障害研究会ホームページならびに「言語発達障害研究」で公表し，周知をはかる。

2

コミュニケーションの状況と ニーズに関する実態調査結果

—放課後等デイサービス・放課後支援を含む余暇支援, 移動支援,
レスパイトケアにおけるコミュニケーションに関する実態調査の実施—

(アンケート調査)

(1) 目的

言語発達障害児者のコミュニケーションの実態と、支援者であるコミュニケーションパートナーのニーズを明らかにするために、調査を実施した。

(2) 調査方法

①多肢選択式および自由記述による質問紙法

②調査期間：2013年11月～12月

③調査用紙は「コミュニケーションパートナーの方への質問紙」（資料参照、質問1～11で構成）を使用した。「コミュニケーションパートナー育成支援セミナー」案内に同封し配布（計4,607通）した。

回答者は用紙に記入ののち郵送にて返送した。

④回収数：317件

(3) 結果

I. 回答者情報

①回答者の属する事業所等の所在地

北海道から沖縄まで28都道府県より回答があった。内訳は福島県の65件（20.5%）を含む東北が115件（36.3%）、神奈川県59件（18.6%）を含む関東が165件（52.1%）、その他の地方が32件（10.1%）であった。

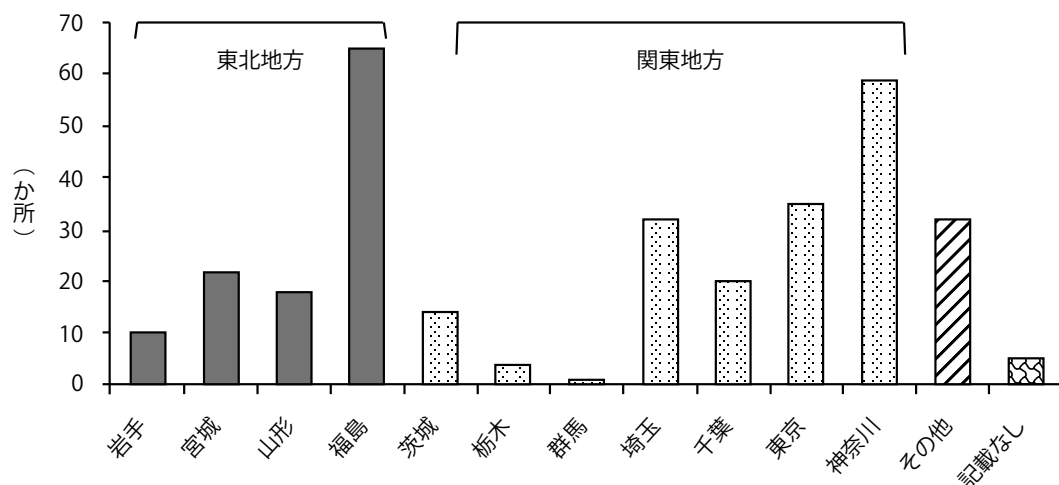


図1 事業所等の所在地

②回答者の経験年数

回答者の経験年数について「今の仕事：経験年数（現在）」と「福祉など関連する仕事の通算：経験年数（通算）」の双方を尋ねた。「経験年数（現在）」は、「5年以下」が165名（52.1%）と半数以上を占めていた。ついで、「21年以上」の58名（18.3%）、「6～10年」の55名（17.4%）であった。

「経験年数（通算）」では、「5年以下」「6～10年」「11～20年」がそれぞれ20%強と同程度であった。一方、「未記入」も66名（20.8%）と多かった。これは設問が「福祉など関連する仕事の通算」と

なっていたため、福祉以外の教育、医療等での経験年数をカウントしなかったためと思われる。所属を「学校」とした87名のうち、3割（26名、30.0%）が未記入だったことからこのことが推測される。

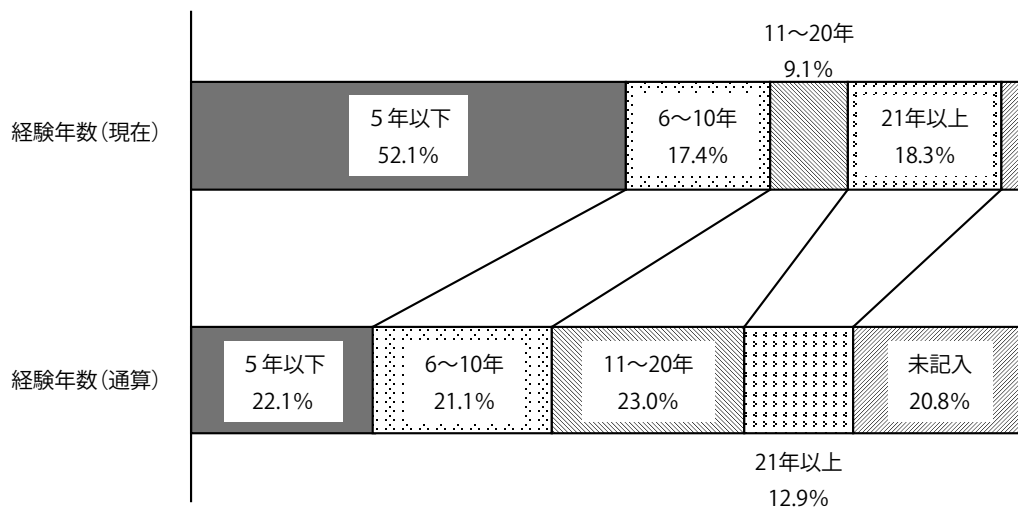


図2 現在の仕事の経験年数と、通算の経験難数の比較

③事業所別

事業所別では「放課後等デイサービス」が最も多く102名^{注1}（28.3%）、ついで「学校」84名（23.3%）、「児童発達支援事業」46名（12.8%）であった（複数回答あり）。

所属別にみると、回答が最も多かった「放課後等デイサービス」では経験年数が「5年以下」の者が9割近く（88.2%）を占めており、その他の福祉関連の事業も同様の傾向だった。一方、「学校」については「21年以上」の者が43名（51.1%）と半数を占めており対照的であった。

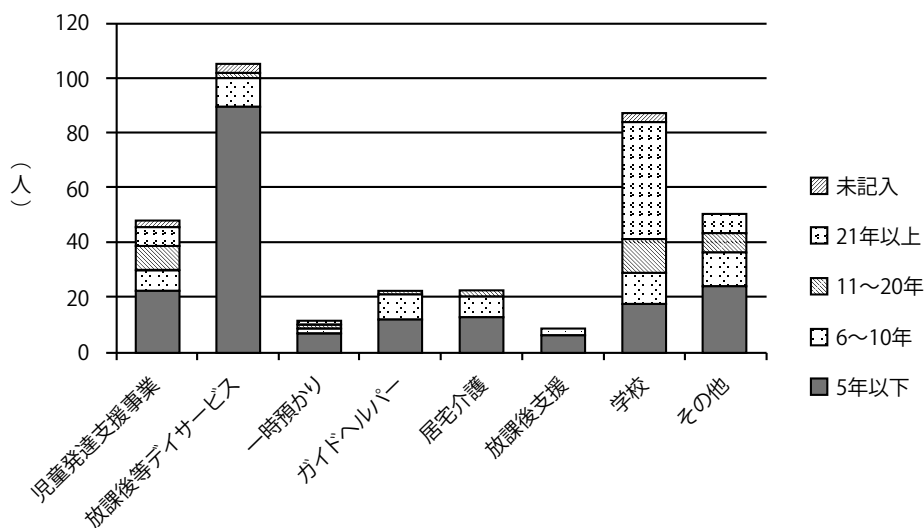


図3 所属別の経験年数（現在）

注1 「複数回答あり」の設問における割合（%）は、全317件中の出現率を示す。

II. 言語発達障害児者のコミュニケーションの状況

結果についてコミュニケーションの機能別に述べる。

①「要求」について

「要求」の内容と方法について尋ねた（複数選択可）。

「要求」の内容では、「遊んでもらうこと（遊び）」を71.0%が選択しており、ついで「トイレに行くこと」58.4%、「どこかに行く（移動する）こと（外出）」が53%であった。

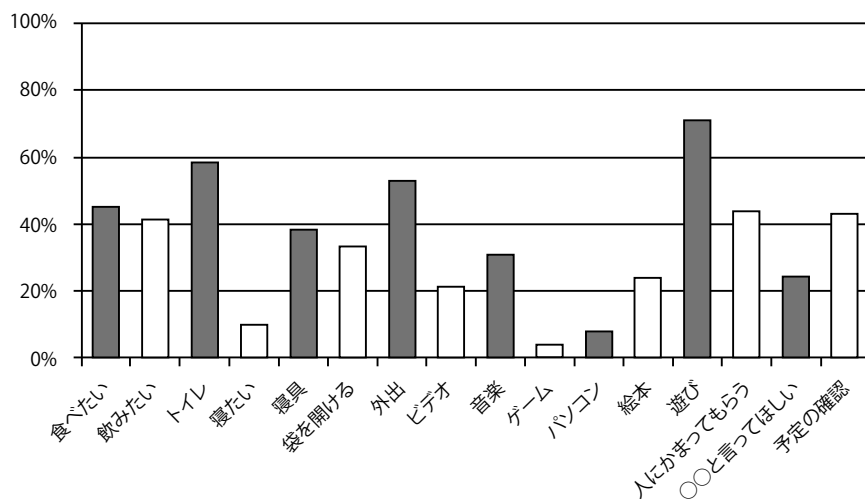


図4 よくある「要求」の内容

「要求」の方法では、「ことばで言う」が81.7%と最も多く、ついで「手をひっぱって連れていく」「指さしをする」「発声する」「身ぶりをする（ちょうだいなど）」の順で多かった。一方、「泣く」「怒る」という直接的な感情表現によるものもそれぞれ44.8%、47.3%であった。動作や身ぶりでの表現、実物・絵・文字など視覚的記号による表現など、要求手段は音声言語（ことば）だけでなく、多岐にわたっていることがわかった。

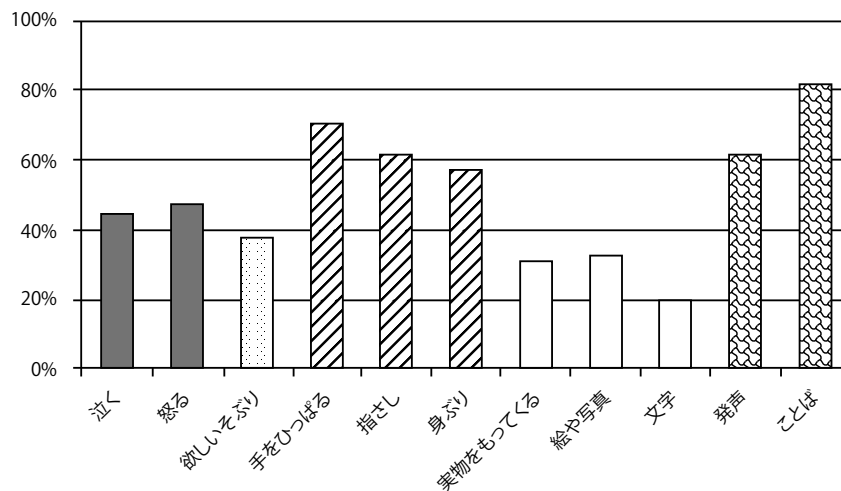


図5 「要求」の方法

②「報告」について

「報告」の内容と方法について尋ねた（複数選択可）。

「報告」の内容では、回答は多岐にわたった。「過去の出来事について（その日にあったことなど）」が48.3%にみられ、ついで「乗り物（車、電車）」、「テレビのキャラクター」、「人」についてが多かった。

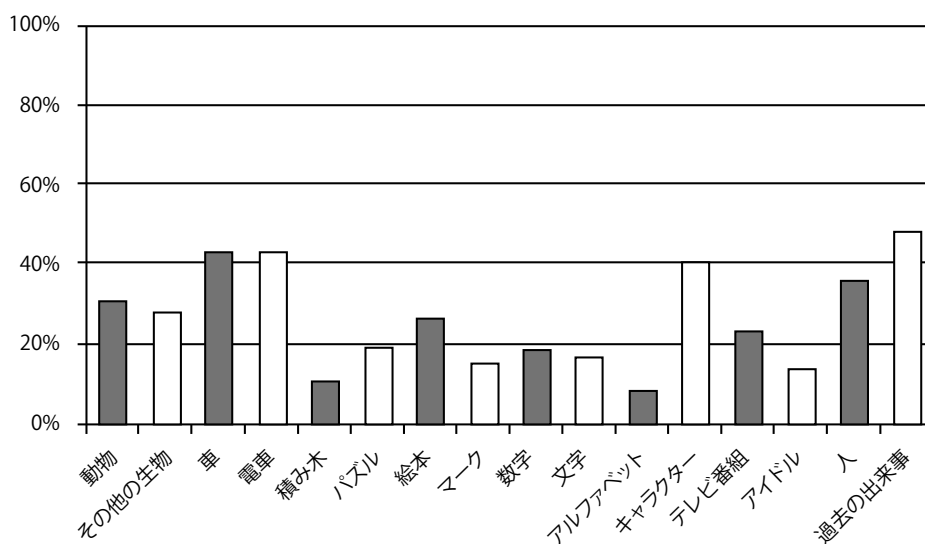


図6 よくある「報告」の内容

「報告」の方法では、「ことばで言う」が最も多く78.9%が選択していた。ついで「指さしをする」が65.9%、「顔を見る」が50.8%であった。

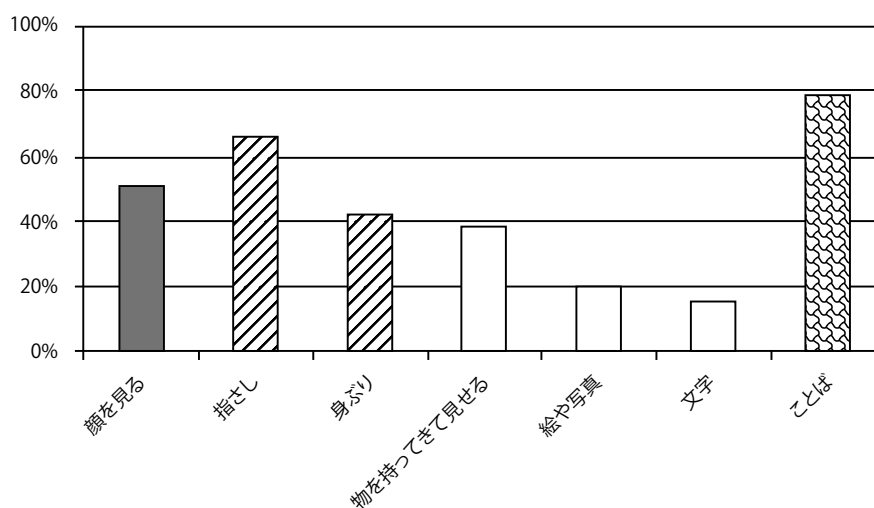


図7 「報告」の方法

③「注意をひく」について

「注意をひく」方法を尋ねた（複数選択可）。

「発声」「名前を呼ぶ」「『ねえねえ』など声をかける」などの音声を使った方法以外に、「服などをひっぱる」ことで注意を引いたり、「叩く」「怒られることをする（物を投げる等）」という不適切な方法で注意を引く行動も半数近くでみられた。

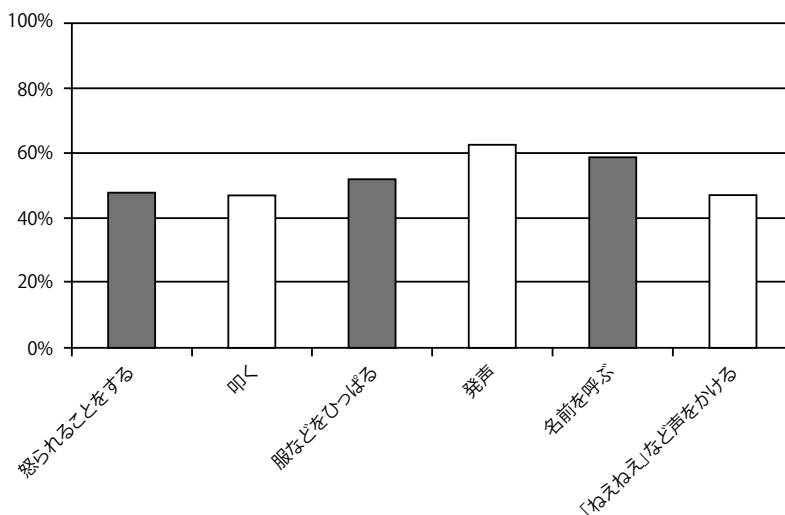


図8 「注意を引く」方法

Ⅲ. コミュニケーションパートナーの状況とニーズ

① 予定や指示の伝え方

言語発達障害児者に対し、どのような手段で予定や指示を伝えるかについては、「ことばで伝える」が最も多く 91.8%であった（複数選択可）。その他、「身ぶりで伝える」が 53.6%、「絵や写真で伝える」が 67.5%、「文字で伝える」が 55.8%であり、多くのコミュニケーションパートナーが音声言語（ことば）と併用して視覚的な手段を使用していることがわかった。

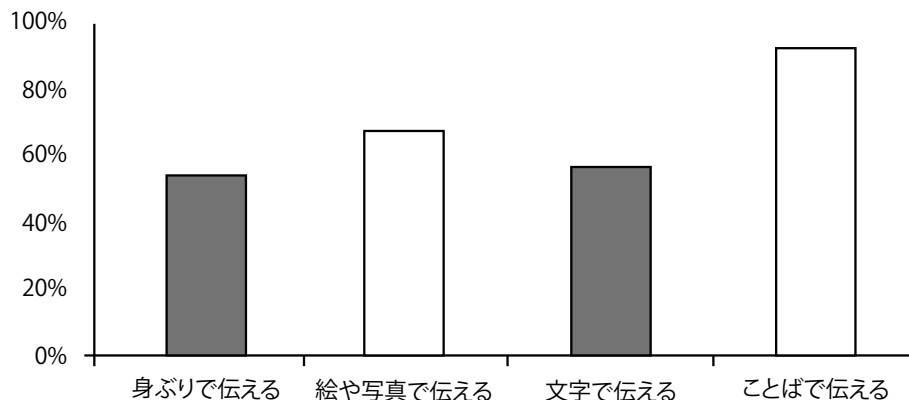


図9 予定や指示の伝え方

「絵や写真で伝える」際に用いる絵や写真は誰が準備するかでは、「スタッフ」が58.4%で最も多かった。ついで「学校」が18.9%、「保護者」も16.4%であった。

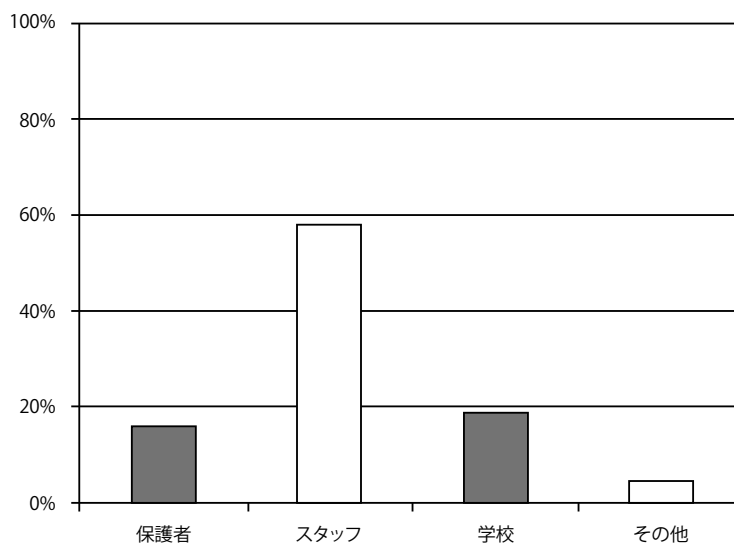


図10 絵や写真を準備するのはだれか

②コミュニケーションで困っている状況

コミュニケーションについて困っている状況については、「言語理解に関すること」、「言語表現に関すること」、「行動に関すること」のいずれもが選択されていた（複数選択可）。

「いらいらして、やりたくないとき、対応が難しい（やりたくない時の対応が困難）」が最も多く51.7%と半数以上の回答者が選択していた。ついで「発語がない」47.3%、「発音が不明瞭」44.5%、「質問に答えられない」42.3%であった。

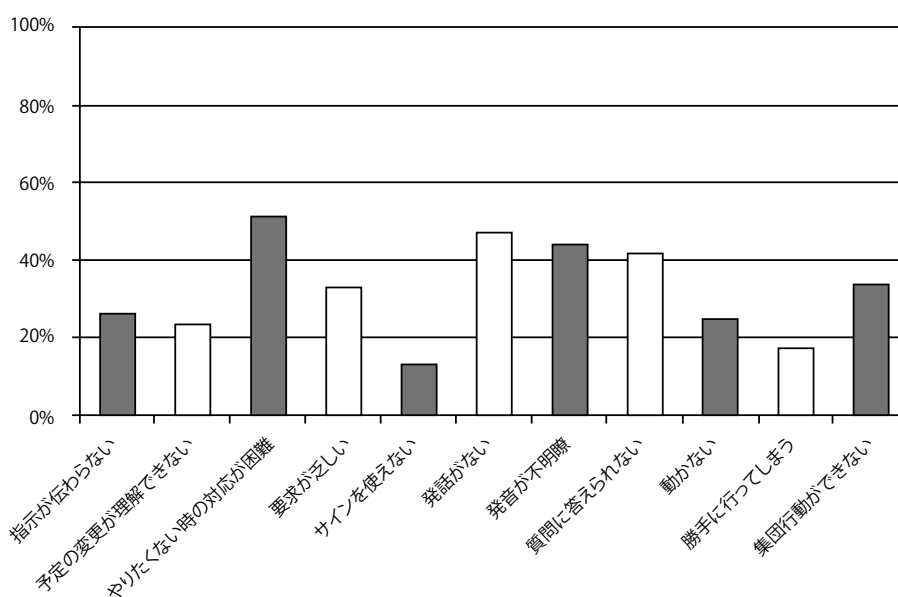


図11 コミュニケーションで困っている状況

自由記述には 47 名が回答した。「言語理解に関すること」では「理解力は高いと思われるが、実際にどの程度かわかりにくい（所属先不明）^{注2}」、「本児がどこまで理解しているかがわからない（放課後等デイ）」のように言語発達障害児者へのアセスメントが十分でないため伝わらないという可能性がうかがえた。「言語表現に関すること」では「自分の思っていることがうまく伝えられない（学校）」だけでなく、「自分が気にしていることを何度もくり返し尋ねる（学校）」のように不適切な場面での発話についても困っていることがみ受けられた。

「行動に関すること」では「行動におちつきがない（学校）」「問題とされる行動を何度も繰り返す（児童発達支援事業）」のように行動が過剰で問題となっている場合がある一方、「指示待ち（放課後等デイ）」「自分から周囲に働きかけることが苦手で常に受け身になっている（学校）」のように適切な行動が起こりにくく困っているという記載もみられた。その他、「他の児童とのトラブルが多い（学校）」など子ども同士の関係についての悩みもみられた。

ことばの理解力がわからないために対応困難（評価不足）、行動上の問題（パニック、受け身）への対応などのニーズが浮かび上がった。

③相談者

困ったときの相談相手は「職場の同僚」が最も多く 63.7%、ついで「職場の上司・責任者」58.7%、「職場の先輩」47.0%であった。「利用児者の家族」に対しても 3 分の 1 以上(37.5%)の者が相談していた(複数選択可)。

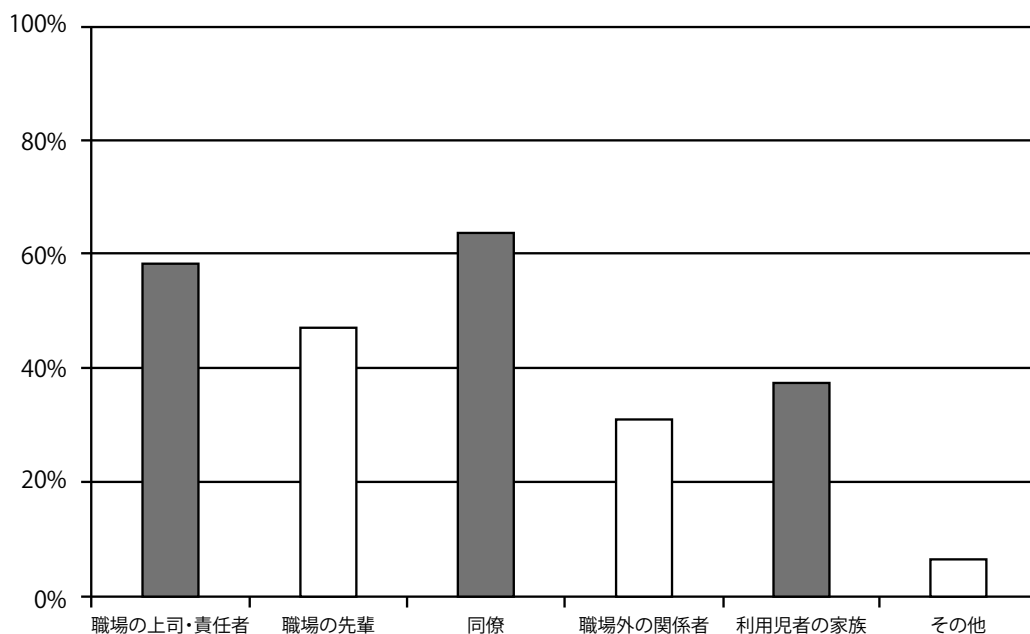


図 12 困ったときの相談相手

注2 「 」内の（ ）は回答者の所属を表す。

④研修について

a. 研修歴

研修歴については、「職場研修」72.9%、「自主研修」62.5%と、主に仕事に就いてから学んでいた。仕事に就く前の研修（「学生時」25.9%、「資格取得時」38.5%）は半数以下であった（複数選択可）。

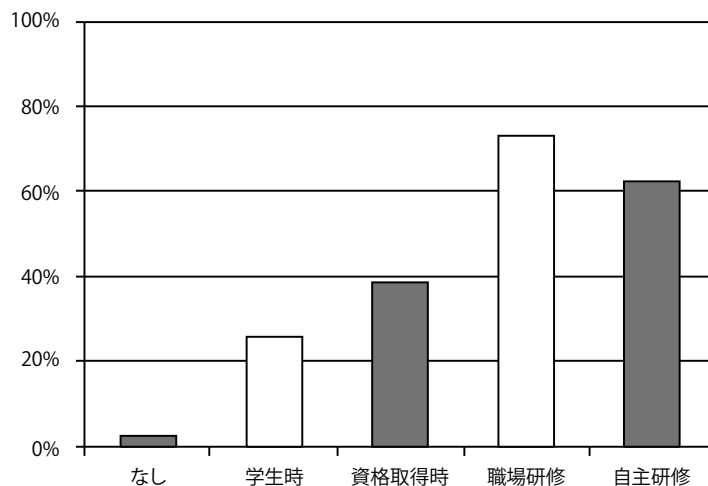


図 13 研修歴について

b. 研修の必要性

研修内容別に研修の必要性を3段階で尋ねたところ、「自閉症・知的障害・脳性麻痺などについて」、「言葉の発達について」、「コミュニケーションについて」はそれぞれ7割以上の回答者が「必要性が高い」と答えていた。「サイン、シンボル、コミュニケーションボードについて」も57.1%が「必要性が高い」と答えていた。

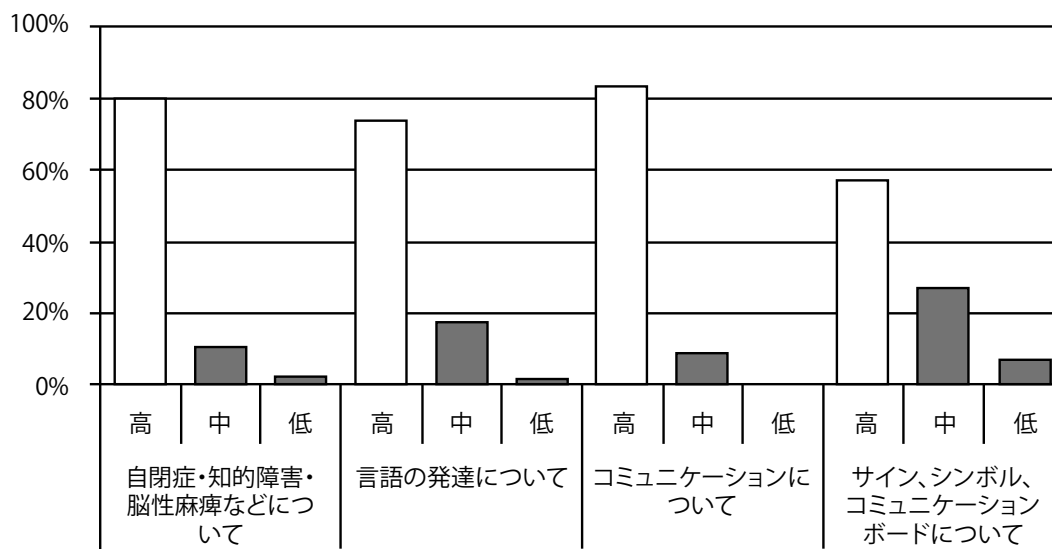


図 14 研修の必要なテーマ

⑤コミュニケーション上の工夫

利用児者とのコミュニケーションで工夫していることについて 184 名から自由記述による記載があった。

言語聴覚障害児者に対してわかりやすい伝え方、具体的にはゆっくり、短い文で、目を見て、理解できるような話し方を心がけているという記載が 40 件あった。また絵・写真、文字などの視覚的な手段を利用して伝えるよう工夫していると答えたのは 47 件にのぼった。身ぶりやサインを利用しているとの意見も 12 件あった。一方、「ジェスチャーばかりの子には、ジェスチャーではなく、言葉で伝え、身ぶり手ぶりなどはしない（児童発達支援事業）」「絵カードに頼らずに（ジェスチャーを少しだけ使うこともたまにある）基本ことばでコミュニケーションをとる（児童発達支援事業、放課後等デイ）」の意見もみられた。

予定や手順を前もって伝えるよう工夫していると 19 名が答えていた。その他、子どもの好きな題材や興味あることを話題にする（15 名）、時間をかけて子どもの話を聞いたり待つ（9 名）、スタッフや保護者と情報共有をはかる（4 名）、iPad など機器を利用する（4 名）、評価を大事にする（3 名）などの意見があった。

コミュニケーションパートナーである支援者は、わかりやすい伝え方を工夫し、必要な子どもには視覚的手段を併用したり、子どもの興味にあわせた活動を取り入れるなど働きかけを工夫していた。しかし、子どもの評価を元に、ニーズに合わせた適切なコミュニケーション手段を選択することには混乱がみられた。

⑥自由意見のまとめ

最後に、発達障害のある人とのコミュニケーションについて、日頃感じていることを自由に書いていただき 157 名の意見があった。「利用者によって、その利用者に合わせてコミュニケーションを行おうと心がけています（放課後等デイ）」のように個々に合わせた働きかけを工夫しているが、3 割近く（42 件）が「意思疎通がとても難しい（所属先不明）」という意見を記していた。

具体的には、「本人の欲求が何なのか理解することが難しい場合にはパニックになってしまうため、本当のところ何を要求しているのかわからない（放課後等デイ）」「言葉が不明瞭な利用者とのやりとりの際に言葉を分かってあげられないことがある。利用者の小さいサインを見逃してしまっている（放課後等デイ）」のように子どもの伝えたい内容がスタッフには伝わらず、わかってあげられないという悩みがあった。また、「言葉で伝わらないときにどのような方法で伝えるとよいか、そのときの状況によって異なるので、その都度方法を変え、対応しているが、その方法でよかったのか（幼稚園）」のように、子どもへの働きかけ方についての迷いも散見された。「短時間利用が多く、コミュニケーションをとれるようになるまでに多大な時間がかかる（放課後等デイ）」というように、余暇支援等のサービス形態に伴う新たな悩みもあげられていた。

その他、家庭や学校など子どもの生活する場で一致した対応をするための連携の必要性や家族支援の重要性について（22 件）、日々の学習や研修の必要性（18 件）について、多くの回答者が記入していた。働きかけを工夫していても、意思疎通がうまくいかない場合があり、日々言語発達障害児者に対応しているコミュニケーションパートナーの切実なニーズが浮かび上がった。

IV. まとめ ー今後の課題ー

①回答者の属性

言語発達障害児者に関わってきた年数はさまざまであったが、「放課後等デイサービス」等の福祉サービスは比較的新しいサービスで急速に広がっているため、当該事業での経験は浅い者が多いことがわかった。

②言語発達障害児者のコミュニケーションの状況

音声言語でのやりとりが可能な言語発達障害児者だけではなく、発語がない、指示が伝わらない児者にも対応していた。子どもたちは、さまざまな内容の要求や報告を、ことばだけでなく指さしや身ぶり、実物や絵や写真などで伝えていた。しかし、泣く、怒るなど直接的な感情表現で伝えたり、叩いたり物を投げるなど不適切な行動で伝える場合もあった。

③コミュニケーションパートナーの状況とニーズ

多くは職場研修や自主研修を積み、コミュニケーション上のさまざまな工夫をしていた。しかし、意志疎通が難しく、行動上の問題への対処に困る場合も多く、より具体的で効果的な対策を求めている。また短時間の関わりで、子どもの特性が十分つかみきれない場合もあることが示唆された。

3

セミナー

「放課後や休日のコミュニケーションを豊かにするために」

(1) セミナー開催概要

I. プログラム

①日時：2014（平成26）年1月19日（日）10:30～16:00

②場所：総合南東北病院（福島県郡山市）

③内容

時間	内 容	
10:00	講演会	受付開始
10:30～11:30		「発達障害児とのコミュニケーションー発達段階を踏まえてー」 講師：倉井 成子
12:30～13:15		「自閉症スペクトラムの人とのコミュニケーション」 講師：梶縄 広輝
13:15～14:00		「肢体不自由児とのコミュニケーションー道具と工夫ー」 講師：知念 洋美
14:00～14:15		質疑応答
14:30～15:30	相談会	保護者ならびに専門家・支援者向け相談会

II. 参加状況

①参加者数

講演会 一般参加者 159名，スタッフ 17名，計 176名

相談会 3組

②講演会参加者内訳

講演会の参加者内訳を図1，図2に示す。

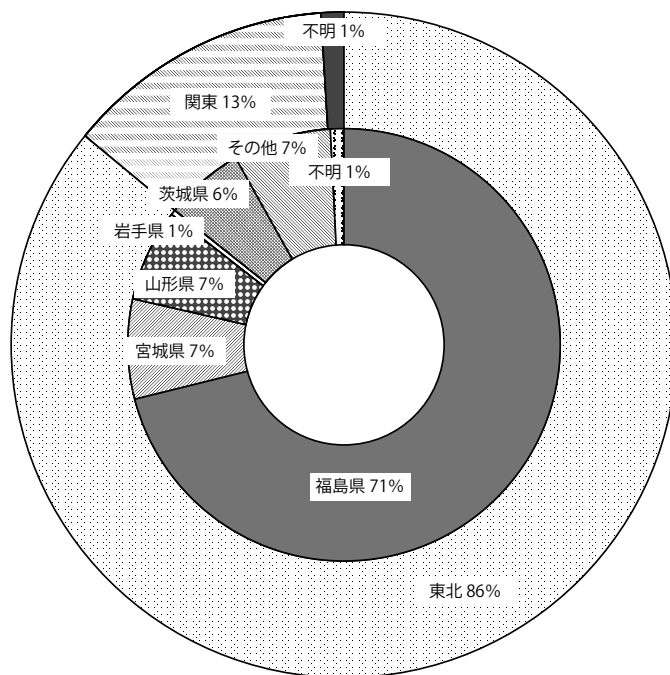


図1 都道府県別講演会参加者内訳

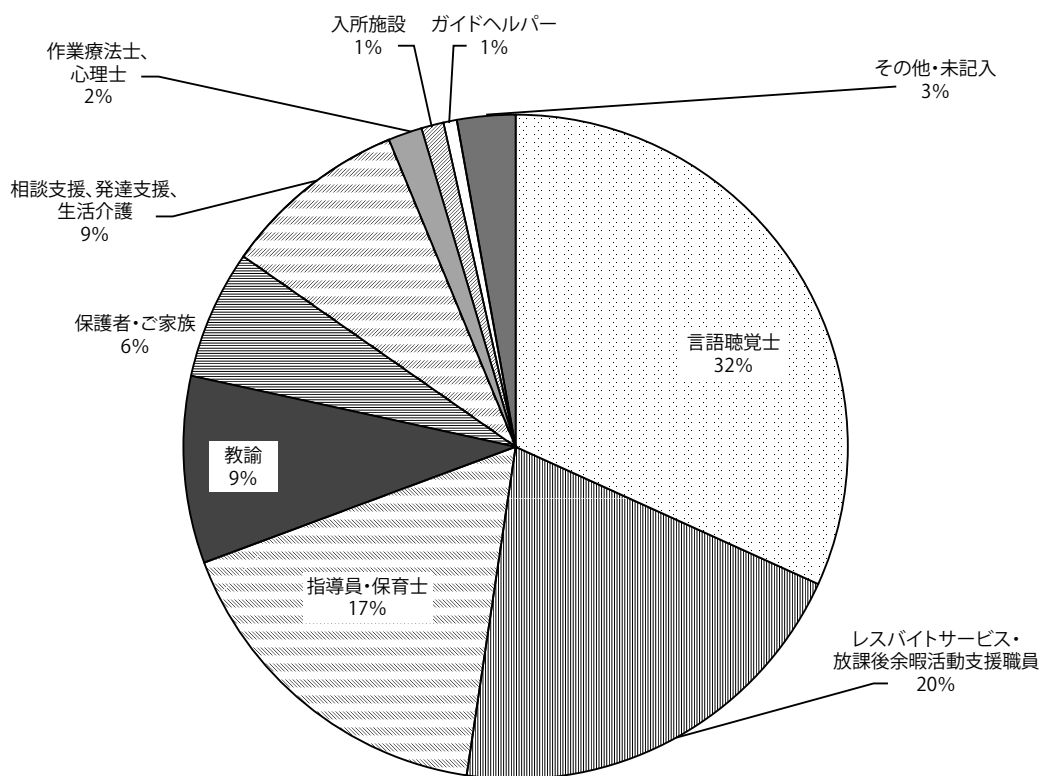


図2 所属または職種による内訳

(2) 講演会内容

コミュニケーションパートナーとは

横浜市総合リハビリテーションセンター 佐竹恒夫

人がコミュニケーションをとる相手のことをコミュニケーションパートナー^{注1}という。言語発達障害児者のコミュニケーションパートナーとしては、家族、地域生活では近所の人・友達・種々の店の店員、療育や教育スタッフ、放課後等デイサービス・ガイドヘルパーや様々な余暇活動に関連するスタッフ、などがある(図1, 表1)。これらの人々がコミュニケーションパートナーとして、発達障害児者と良好なコミュニケーションをとることにより、発達障害児者の生活の質(QOL)が向上する。



図1. みんながコミュニケーションパートナー

表1. コミュニケーションパートナーとは

療育・教育etc.	家族・近隣	スタッフ
<ul style="list-style-type: none">言語聴覚士・理学療法士・作業療法士・臨床心理士教員保育士・指導員医師・看護師etc.	<ul style="list-style-type: none">父母きょうだい祖父母・親戚ともだちお店・コンビニ理容・美容院運転手etc.	<ul style="list-style-type: none">放課後等デイサービススタッフガイドヘルパーレスパイトサービススタッフ余暇活動支援スタッフ

発達障害児者のコミュニケーションパートナーとなるスタッフは、従来から“専門家”と言われる療育や教育スタッフに加え、近年児童デイサービスやショートステイ・ガイドヘルパーなど携わるスタッフが増大している。

注1 AAC (拡大・代替コミュニケーション) の領域などで広く用いられている。(Beukelman,D. & Mirenda,P.:Augmentative and alternative communication. 2nd ed. Paul H. Brookes, Baltimore, 1998)

言語発達障害研究会の支援対象

言語発達障害研究会では、1987年から専門家向け講習会やセミナー、2009年度からは保護者支援として「家族支援セミナー」、2012年度からは関係スタッフ連携支援として「コミュニケーションパートナー育成支援セミナー」を開催し支援の対象を拡大した(図2)。

セミナーでは、コミュニケーションパートナーに、発達や障害を理解するための視点や知識、普段から手軽に使える効果的な工夫を呈示し、日常的なコミュニケーションを円滑にまた活性化する手立てをお伝えした。

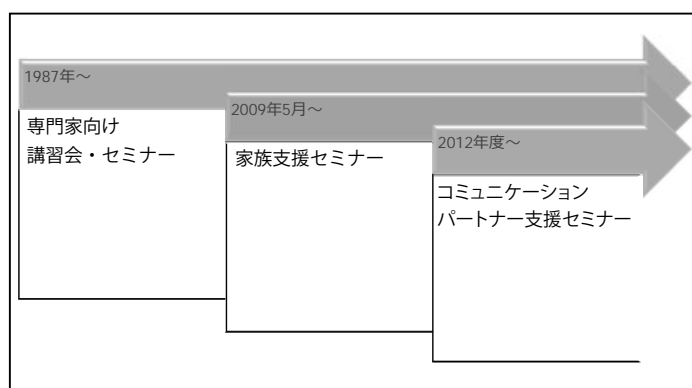


図 2. 言語発達障害研究会の支援対象

2007年にコミュニケーションパートナーへの支援について記している。「(言語発達障害児者には家庭・園・学校・)職場のみならず、レクリエーションとレジャーなどの機会には種々の利用施設の職員やボランティア外出時の介助やガイドヘルパーなどコミュニケーションの相手が増えることになる。その人達と円滑なコミュニケーションが成り立つことは重要でありそのために言語聴覚士(ST)が果たす役割があると考えられる。」(言語発達障害へのコミュニケーション支援の手引き 多様な支援の展開を目指して 8頁 佐竹恒夫 2007)

言語発達障害とは？

言語発達障害とは、言語とコミュニケーションに何らかの発達の障害のある児童・成人の全てをいう。障害としては、知的障害、肢体不自由(脳性麻痺など)、自閉症(ASD)、“発達障害”(知的障害を伴わない)、LD(学習障害)、アスペルガー症候群、注意欠陥多動性障害、重複障害(難聴と知的etc.)、などがある(表2)。

表 2. 言語発達障害とは？

<ul style="list-style-type: none">■ 知的障害■ 肢体不自由(脳性麻痺など)■ 自閉症(ASD)■ “発達障害”(知的障害を伴わない)<ul style="list-style-type: none">■ LD(学習障害), アスペルガー症候群, 注意欠陥多動性障害■ 重複障害(難聴と知的障害etc.)

1. はじめに

本報告は、聴こえに問題がない、発達障害のある子どもを対象に、発達段階に応じたコミュニケーションやことばの支援の仕方である。

コミュニケーションは話し手と聞き手の間で、何らかの話題について、何らかの手段で、相手からの働きかけを受け止め、また自己の伝えたいことを、相手を意識して伝える行動である。ことばやコミュニケーションの支援においては、手段の獲得や子どもが相手にどうして欲しいのかというコミュニケーション行動の働き（コミュニケーション機能）、話題の広がりについても考える必要がある。発達途上の子どものコミュニケーション手段はことばが理解できていない段階も含めるので、話しことば以外にも視線、構え、手を引っ張る（クレーン、ハンドリング）、手差し、指差し、物を見せる、絵や写真、身ぶり、文字など広く考えなければならない。コミュニケーション機能では、要求、報告、注意喚起、挨拶、会話など子どもの発達に合わせてできていることが望ましい機能も考慮する。

上述のようにコミュニケーション手段は色々あるが、その中でも話しことばはその中心になるものである。そして、言語発達では話すより先にことばの理解ができることが重要なので、理解の発達レベルに合わせた働きかけを考えることが大切である。図1にことばの理解の発達段階を示した（図1）。

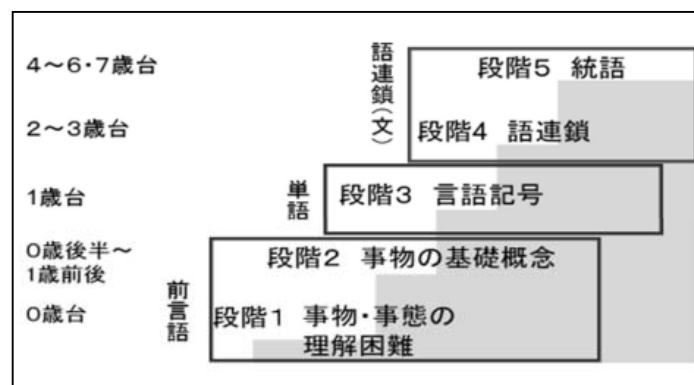


図1 ことばの理解の発達段階

大きく分けて前言語の段階、単語獲得の段階、語連鎖（文）の段階がある。前言語期の内、段階1は物・人・状況の理解が難しい段階（0歳台前半）、段階2は物・人・状況は少しずつ分かるようになって来たが、ことばの理解はまだできない段階（0歳台後半）。段階3は物や人には名前があることを知り（事物の名称や人の名前）、次第に動作（動詞）や状態を表すことば（形容詞）なども理解するようになる段階である（1歳台）。段階4は2語連鎖（本稿では2語文とした）の段階（2歳前半）、3語連鎖（3語文）の段階（2歳後半～4歳）に分けられる。段階5は統語の知識（文法知識）が獲得されていく段階で語順の段階（4歳～5歳台）、助詞の段階（6歳台～）に分けられる。発達障害児においては子どもがどの段階にいるのかことばの検査や行動観察、家庭や集団生活での様子などから見極め、また全体的発達の状況や他職種の情報などを総合して全体の様子を把握し（評価）今後のコミュニケーションやことばの発達支援を考えることが重要である。

注1 ここで言う発達障害とは知的障害、肢体不自由、自閉症などによる発達の遅れをさす。

2. 発達段階に沿ったことば・コミュニケーションの働きかけ

以上のことを踏まえながらことばの発達段階について定型的な発達とコミュニケーションの状態を説明し、次に、それらを参考にしながら、ことば・コミュニケーションの発達につまずいている子どもへの働きかけについて述べる。

図1のことばの理解の発達段階を取り入れながら次のように発達段階を分けて説明する。

- 1) ことばを理解していない段階（段階1～段階2）
- 2) 単語が分かる（聞いて理解する）ようになった段階（段階3）
- 3) 2語連鎖及び3語連鎖以上が分かるようになった段階（段階4～段階5）

1) ことばを理解していない段階（段階1～段階2）

ことばを理解していない段階の定型発達児の様子（段階1～段階2）

- 周囲の物や状況が理解できない段階（段階1）0歳前半
- 少し分かってきた段階（段階2）0歳後半
 - ・ 身近な物の意味，人の区別ができ始める。
 - ・ ことばはまだ出ないが12か月に近づくとうわかることばが少しずつ増える。
 - ・ コミュニケーションの基盤が発達
 - 物のやり取り，視線の共有，社会的参照など
 - 要求 視線，物を示す，相手の手を引っ張る指さし，構え
 - 絵カードや身ぶりでの意思表示は困難
 - 拒否 顔をそむける，のけぞる，嫌な食べ物は舌で押し出す。

定型的な発達を参考に、この段階にいる発達障害児の言語・コミュニケーションの目標と関わり方を考える。

(1) 目標

- ①身の回りの物・人・状況に関心を持ちそれらの意味が分かるようになる。
- ②人と関わることの楽しさ，有効性などを知る。
- ③要求や拒否，注意喚起ができるようになる。
- ④視線を合わせることができるようになる。

(2) 関わり方

- ①生活の流れ（活動の順番）とそこで使用する物を一定にし，次の行動を予測できるようにする。

この段階の子どもは周囲の物や人，状況への関心が十分ではない。活動の順番やそこで使われる物を一定にし決まったことばをかける（外出時には決まったカバンを子どもに見せ“お出かけしよう”とことばをかける）。そのようなことを続けて行くと，子どもは次第に物を見て次に起きる事態を予測できるようになることがよくみられる。また，今は難しくても将来カバンと「おでかけ」ということばが結びつく機会を子どもに与えていることにもなる。

②子ども自身が生活活動に参加する。片付け、支度、物運びなど（図2, 3）



図2 ゴミ捨てる

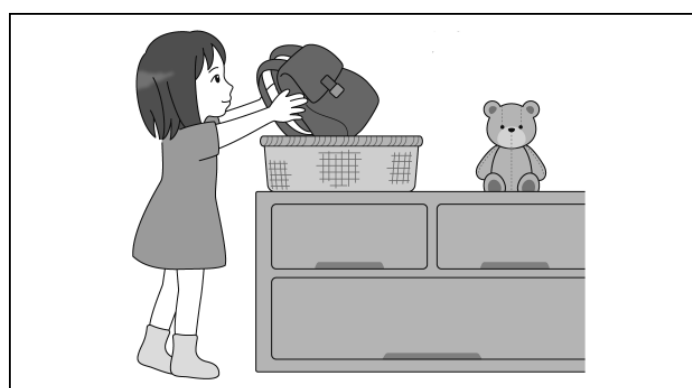


図3 リュックを片付ける

ことばをまだ理解していない段階では、子どもの学習はゆっくりなので、2, 3日やってみて反応がないからと諦めないことが重要である。適切な内容を、根気よく丁寧に、子どもの反応（特に子どもがどこを見ているか）を確認しながら働きかけることが要求される。

例えば、片付けを一緒にやることもよい。片付けは子どもが物を持つ機会となる。物を持っている時は物への子どもの注意が高まる時でありその時“お片付け”，“ナイナイ”などことばをかける，あるいは物の名前を言って聞かせると持っている物への認識が高まると同時にことばとの結び付けを促す機会になる。毎日必ず行う行動（食事など）の中で子どもにできそうな部分を取り上げ，初めは介助しながら，そして少しずつ一人でやってもらうようにするとよい。図2, 3のゴミ捨てるやリュックの片づけの他に食べ終わったお皿をお盆に片付ける，脱いだ洋服を決まったカゴに入れるなどが取り入れ易い。

- ③今すぐではなくとも将来，物に名前があることに気付けるように，子どもが物を持っている時に，成人語だけでなく幼児語，擬音，身ぶりをを用いて働きかける。
- ④物を渡す時，子どもと視線が合うように配慮する（渡す相手は自分の目の近くに物を持って来るなど）。
- ⑤遊び 遊びは楽しみながら物の操作を学習したり，人との関わりを育てていく場でもある。発達が初期のレベルでは，子どもに遊び方の見本をみせても関心を示すことが少ない。逆に遊び相手が子どもの遊び方を模倣すると関心を示し，そこから遊びの内容や人との関係が発展することもある。物を一度に全部渡すのではなく視線が合うように気を付けながら1つずつ渡すような関わり方も大切である。身体を使った遊びや手遊びは多くの子どもが好み，かつ相手をしてくれる人が必要な遊びなので，もっとやっ

て欲しいと相手に要求をするようになることがよく見られる。

⑥要求や拒否，注意喚起が適切にできるように働きかける。

▶お替わりでお皿やコップなどを「そっと」出す。「ちょうだい」の身ぶりをする。

▶乱暴に拒否せず「そっと」する。嫌いな食べ物を手で強く払いのけるような乱暴な拒否をせず、「そっと」手で押しやるなど。

▶相手の注意を自分に向かせたい（注意喚起）時はそっと人の肩を叩く。

子どもが乱暴（と周りに思わせてしまう）な行為をするのはやり方が分からないことも多いと推測されるので、「そっと」の力加減を，手を取って教えることも必要である。

また，人の食べ物をとってしまうような場合，「ちょうだい」の身ぶりを介助しながら教えていくと次第に何か欲しい時は「ちょうだい」身ぶりをするようになることも多い。何か欲しいが周囲の人に訴える方法が分からないため泣いたり怒ったり（噛む，頭突きなど）するような場合，それも注意喚起ではあるが，より望ましいのは相手の肩や腕などに優しく触れるやり方であることを教える。このような社会的に容認されたやり方を学習することで，相手に自分の意図が伝わることを知ると子どもが安定することがある。

2) 単語が分かる（聞いて理解する）ようになった段階（段階3）

単語が分かるようになった段階の定型発達児の様子（段階3）

状況と無関係に物の名前が理解できる段階

- ・見えない所の物をことばで言われて持ってきたり，「ワンワンはどれ」，「食べているのはどれ」のように物や動作などをたずねられると絵本などの絵を指させる。
- ・ことばを模倣したり，不明瞭でも自発的に話し始めることもあるが，まだ話せないことも多い。
- ・要求や拒否，注意喚起，報告などがことば，指さし，声などでできるようになる。

ことばの発達段階が1歳台と思われる発達障害児の目標や関わり方について，定型発達児の様子を参考に考える。

(1) 目標

- ①分かる単語が増える（名詞だけでなく動詞や形容詞なども）。
- ②2語文が分かるようになる。
- ③要求や拒否，注意喚起，報告がどのような手段でも良いからできるようになる。
- ④視線を合わせることができるようになる。

(2) 関わり方

- ①生活の流れ（活動の順番）とそこで使用する物を一定にし，次の行動を予測できるようにする。
- ②子ども自身が生活の活動に参加する。

単語を獲得して来てはいるが，周囲の物や人，状況の認識は十分ではないので，ことばがまだ獲得さ

れていない段階と同じような配慮が必要である。

- ③物や人の名前だけでなく動作や状態についてもことばかけをする。

色々な物や人の名前が分かるようになって来たら、日常的に動作（動詞）や状態（形容詞）などや簡単な2語文を聞かせることも大切である。

- ④周囲の人は成人語だけでなく、幼児語、擬音をふんだんに使う。身ぶりもできるだけ使用することが望ましい。場合によっては絵カードなども併用する。

幼児語や擬音は物や状況を成人語よりイメージしやすく、また発音も子どもが出しやすい音の繰り返して構成されていることば（“ワンワン”，“ブーブー”など）が多い。身ぶりも同様でその動作は物をイメージしやすい。身ぶりと同時にことばをかけると（歯を磨く動作と“シュッシュ、歯磨きしよう”）より効果的である。成人語を模倣することや自発的に話すことが難しくても、幼児語、擬音、身ぶりの模倣は子どもにとってやりやすく模倣することから自発につながることも多い。

絵カードや写真もコミュニケーションに効果的である。これから行うことを、ことばや身ぶりと一緒に写真も示すと子どもがよくわかるということも多い（給食の直前に給食の写真を見せ“ごはん”ということばと食べる身ぶりを見せる）。絵カードや写真を併用しているうちにそれらを使わなくても、ことばや身ぶりだけで分かるようになることはしばしばみられる。自閉的な子どもの例を挙げる。

【A君の例】4歳男児 自閉症（単語の理解が可能だが、表現は手を引っ張るなどの動作で行う。図1 ことばの理解の発達段階 段階3）。自分の要求が通らない時は叫び声をあげることが多かった。例えばT君が買い物で行きたい店と実際に母親と行った店が異なった場合叫び声をあげて怒っていた。その時母親は「今日は〇〇に行くよ」とことばだけで説明していた。そこでS Tが母親に、行く店のロゴを見せながら説明することを助言したところ母親はすぐに対応し、複数のよく行く店のロゴを用意しそれを見せながら「今日はここに行く」と予告するようになった。T君もロゴを見て理解するようになり叫ばなくなった。また、T君は自分が行きたい店のロゴカードを母親に見せ要求するようになった。5歳の時には2語文の理解ができるようになりことばも話せるようになった。行きたい店の名前をことばで言うようになり、また、母親と意見が違う場合ロゴカードを見せなくても母親のことばだけの指示に従えるようになった。

- ⑤話せない子どもはまだ多いが、単語の1部で話す（「りんご」を“ゴ”という）、全体に不明瞭だが単語を話す（「りんご」を“イーオ”）ようになる子どももいる。また身ぶりを使用する場合もある。これらの表現は大切なので直さないで正しいことばで応じる。

3) 2語文・3語文が分かるようになった段階（段階4～段階5）

定型発達児でも2語文の段階（2歳前半）と3語文以上の段階（2歳前半～就学前後）では様子が異なり、発達障害児の場合にも当てはまることが多いので分けて考えてみたい。

<2語文が分かるようになった段階>

2語文が分かるようになった段階の定型発達児の様子（段階4）

「ママの目」、「○○と○○持ってきて」など2語つなげた言い方が分かる。

- ・周囲の人からの話しかけはかなり分かるようになり、反応も早くなる。
- ・会話は決まったことなら応答するが質問が分からない時は無反応。
目の前にないことは理解が難しい。
- ・自己と他者の区別ができつつあるがまだ不十分なため、人の物を取ってしまったりすることも多い。
- ・「だだこね」が多く扱いにくい面がある。
- ・2語つなげて話せる子どももいる一方、単語が主ということも多い。
- ・「何」と聞くことが増える。

これを参考に発達障害児の目標、関わり方を考える。

(1) 目標

- ①分かる単語が増える。名詞だけでなく動詞や形容詞なども。
- ②2語文の理解が増える。
- ③要求や拒否、報告、注意喚起などがことばでできる。また簡単な質問に答える。

(2) 関わり方

- ①話せるようになっても単語だけという状態は多い。子どもが単語で要求などして来た時には、周囲の人は2語～3語文で子どもの言い方を広げて聞かせると良い。例えば「○○ちょうだい」（要求）、「○○あった」（報告）、「ママ見て」（注意喚起）などのような2語～3語文で子どもに返す。ただし、無理に模倣させない。
- ②質問をしても応じないというのも2歳前半でよく見られる。恐らく子どもにとっては質問の意味が理解できないあるいは答え方が分からないのではないかと考えられるので、答え方を同時に聞かせる。
- ③困った行動への対応
 - ▶人の物を取ってしまうこともこの段階の子どもでそれほど珍しくない行動である。定型発達児の様子でも述べているが、自己と他者の区別がまだ不十分なためと推測される。すぐにできるようにならなくてもそのような場面では周囲の人は「かして」、「ちょうだい」、「じゅんばん」などのことば掛けを丁寧に繰り返していく必要がある。
 - ▶だだこね 自分のしたいこと、欲しい物などを上手にことばで表現できず、だだをこねて周囲を困らせることも多い。例えば靴下をはかせようとするのをそらせて拒否する、遊びを中断させられて泣

き叫び周囲が説得しても聞き入れないなど。そのような時は子どもの主体性を尊重して靴下なら2足見せて子どもに選ばせる、泣き叫んでしまう場合は何か好きなものを見せて気持ちの切り替えを図ってみるなど良いかもしれない。

< 3 語文以上が分かるようになった段階 >

3 語文以上がわかるようになった段階の 定型発達児の様子（段階 4～段階 5）

- ・ 3 語連鎖の段階になると簡単な会話ができたり、絵本やテレビなどの物語にも関心を示すことや、近い過去のことなら記憶していて経験をはなすこともできる子どもが増える。
- ・ 3 歳前後では気持ちを上手に説明できないことも多く、怒ったり、泣いたりすることもある。
- ・ 自己の行動コントロールが徐々にできはじめる。
- ・ 発達段階が 4 歳程度以上になると説明能力が向上し、ことばで物事が考えられるようになり、また 5, 6 歳になると、内容や話し方を調整しながら人と会話ができるようになる。

これを参考に発達障害児の目標、関わり方を考える。

(1) 目標

- ① 語彙（昨日、今日、明日、果物、飲み物などの抽象的あるいはより上位の意味を持つ語彙の理解・表現）がさらに発達する。
- ② 3 語文～多語文の理解・表現の発達、文法的知識の獲得・拡大、説明能力が向上する。
- ③ コミュニケーション機能が分化する（要求、報告、感情の表現、自己の行動調整、質問－応答など）。
- ④ 色々な事に興味を示す。

(2) 関わり方

- ① 生活の中で色々な単語を聞かせる。

昨日、今日、明日、今度など（過去、現在、未来といった時間に関することば）や食べ物、動物、乗り物のような上位語などが考えられる。この段階になると名詞や動詞など語彙はかなり獲得されているので周囲の人はより難しい単語を意識して聞かせると良い。

- ② なぞなぞ遊びなど

説明能力の向上を促す働きかけはたくさんあるが、例えばなぞなぞ遊びもその一つである。なぞなぞ遊びは単語を文で説明する（「雨の時さすものなんだ」という質問から「傘は雨の時さすものです。」という文を導く）ことを子どもに教えやすい遊びである。初めは物や絵があるほうが分かり易い。

- ③ 子どもが見ていること、やっていることを実況中継して聞かせる。

あるいは子どもの気持ちを推測して表現して見せる。そうすることで、こういう場合はこのような文で表現するのがふさわしいということを子どもが学習できる機会を提供する。

- ④ 2 語文や 3 語文以上で話せる子どもが増えてくるが、不明瞭な発音や助詞の間違いも多い。無理に直さず、正しい文を聞かせる。
- ⑤ 要求する言い方を広げる。「ちょうだい」のような直接的要求表現だけでなく「○○しよう」「○○していい？」などの勧誘、許可の言い方も使えるようになるとコミュニケーションが円滑になることを教える。

⑥「できた」、「終わった」などの報告を促す。

⑦「わかりません」、「教えて」などが言えるように働きかける。

この段階になっても自分の気持ちを適切に表現できず、どうして良いか分からないためその場を急に離れたり、ひっくり返って怒ったりする子どもがいる。その時の子どもの気持ちを代わりに言ってあげてから（「難しかったんだね」）、そういう時は「わかりません」や「教えて」と言うといことを伝えると子どもに対処方法が理解されることもある。自閉的なB君の場合を紹介しよう。

【B君の例】4歳男児 自閉症（言語発達は4歳前後、図1段階5 3～4語つなげて話せる）課題ができない時、ひっくり返ったり部屋から出て行ってしまうので、「わからない」「おしえて」ということをその都度言うように働きかけたところ、次第に同じような場面になると自発的に“ワカラナイ”、“センセイオシエテ”と言えるようになり、先生がそう言えたB君に適切に対応して行く内に落ち着いて課題に取り組むようになった。

⑧会話が困難な場合

▶質問と応答のモデルを聞かせる。

▶答えの選択肢を用意する。

質問に答えられない場合、2歳前半のところでも触れたが、疑問詞の意味やその答え方が分からないこともあると推測されるので、質問者が答えも一緒に示すのも一つの方法である。答え方の選択肢を与えることは日常生活でも行われていると思われる（「今日何して遊んだの？ブランコ？滑り台？」）。

⑨いつもと違うことがあるときは、絵カードや写真を使用して前もって説明する。例えば、普段バスで通園している子どもに、今日は帰りは母親が車で迎えに行くということを、ことばだけで説明しても子どもは見通しが持たず、帰り際大騒ぎになってしまうような時（車が嫌いというわけではない）母親と車が写っている写真を（携帯やスマホでも良い）を見せながら説明するなど。

⑩話題の拡大 興味の範囲が狭い場合、関心がないものでも日々働きかける。子どもが好きなことを大切にしながらも、今日食べた物や買い物に行った場所などについて話して聞かせる。場合によっては絵日記も効果的である。

【C君の例】6歳男児 自閉症（言語発達は3歳前後、図1段階4 2語発話が出はじめた）乗り物への興味が強いので母親が車の絵をたくさん描いて見せていたところ、自分でも車を描くことが大好きになったが、乗り物以外にはあまり関心がない状態であった。そこで描画が好きなことや母親が車を描いている時には集中して見ているので、STが車以外のことも絵日記で描いて見せるよう母親に助言し、母親も熱心に取り組んでくれた。例えば、母親が「アイス食べたね」とアイスの絵を簡単に描きながら話し掛け、また、文字を習得し始めたので絵のそばに「アイス食べた」と文字を書いたり日付も入れるようにした。今まで関心を持たなかった生活の色々な経験を母親が絵で表現してみせると次第に興味を示すようになった。自発的にC君自身がその日のことを描き（例えば、姉と自転車に乗ったこと）、絵のそばにC君が自分で書ける単語を書いて日にちも入れ母親に見せるようになった（報告）。

⑪③や⑦と重なるが、よくしゃべるようになって、特に気持ちの表現が難しいことも（B君の例）しばしばみられる。子どもが泣き叫んでいる時に、周囲の人は「もっと遊びたい」、「ビデオもっと見たい」など子どもの気持ちを代弁して聞かせて行くとよい（そう言えたからといって許されないだろうが）。機会あるごとにそのような働きかけをしていると、気持ちをことばで表現できるようになり泣き叫ばなくなることも多い。

⑫自己の行動のコントロール

- ▶「〇〇してから△しよう」（手を洗ってからおやつを食べよう）が分かる。
- ▶「あとでね」に従える。
- ▶「手はおひざ」目の前に好きなものがあるとなつて手を出してしまうことはよくあることだが、「手はおひざ」のことは掛けで自分を抑えるようになる。
- ▶「そーっと」そのつもりはなくてもおもちゃなどの片づけが乱暴になる子どもは多い。そのような時手を添えてそーっと片付けることを教えると「そーっと」の意味が理解されることがよくある。
これらはほんのわずかな例である。

自己の行動のコントロールは社会生活をしていくうえで非常に重要なことである。周囲から言われていることが次第に子どもの中に取り入れられて子ども自身が自分を律するようになることが期待される（自己内コミュニケーション）。

- ## ⑬人の気持ちが分かるようになる。生活の中で周囲の人がその人自身の気持ちを子どもに伝えていく必要がある。例えば、「ママは〇ちゃんにぶたれると痛い」、「ママも楽しかったよ、嬉しかったよ」など。

3. まとめ

発達障害児のことはやコミュニケーション支援を発達段階に沿って考えた。

コミュニケーションというと子どもの側からの発信を問題にしがちだが、周囲からの働きかけを子どもが受け止める力（コミュニケーションの受信 分かること）を育てることをまず第一に考えることが大切である。そうすることによって子どもは分かるようになったことを自分の意思表示に使用できるようになることが多いからである。

発達段階に合わせた働きかけを工夫することでお互いにやり易くなるだろう。支援する人は、話して欲しい、会話をして欲しいといった家族の気持ちに共感しながら、そうするためには周囲からこのような働きかけをすると良いのではないかという具体的な提案ができることが望まれる。

発達障害がある子どもたちと彼らを取り巻く周囲の人たちが生活しやすくなることは非常に重要である。本セミナーが子どもたちや家族、関係者の方々のQOL（Quality of Life）、QOC(Quality of Communication)を高める支援として少しでも役に立てたら幸いである。

「自閉症スペクトラムの人とのコミュニケーション」

梶縄広輝（よこはま港南地域療育センター）

本報告は、自閉症スペクトラムの人とのコミュニケーションがテーマである。コミュニケーションの概念について説明したのち、事例を通して支援を検討する。

1. コミュニケーションについて

コミュニケーションには、発信（表現）と受信（理解）という2つの方向がある（図1）。本人からの発信は、したいことを伝える要求、したくないことを伝える拒否、報告などである。受信は、他者からの働きかけに応じる、理解する、納得して受け入れるということである。自閉症スペクトラムの人とコミュニケーションをとるためには、その人に応じた発信の仕方、受信しやすい方法とは何かを知ることがポイントとなる。

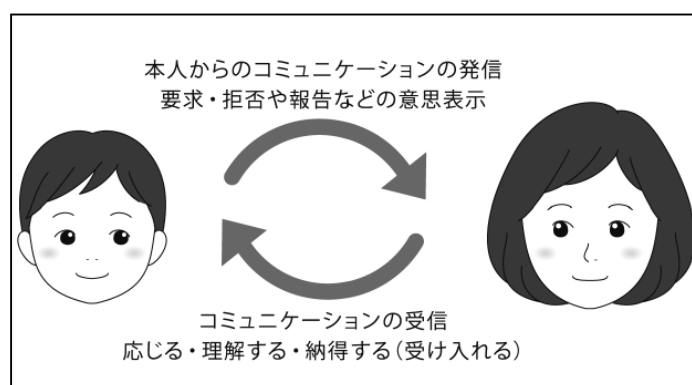


図1 コミュニケーションの2つの方向

受信（理解）には段階がある（図2、「発達障害児とのコミュニケーションー発達段階を踏まえてー」の項参照）。公園へ遊びに行くことを例にとれば、砂場セットなど実物を見ると公園だと分かる段階、公園の写真を見れば分かる段階、公園の身ぶりで分かる段階、「公園」という単語を聞いて分かる段階、「公園でお昼食べよう」「今日は公園にいけないね」という文レベルで分かる段階がある。大事なことは、その人に確実に伝わる手段を用いて伝えることである。

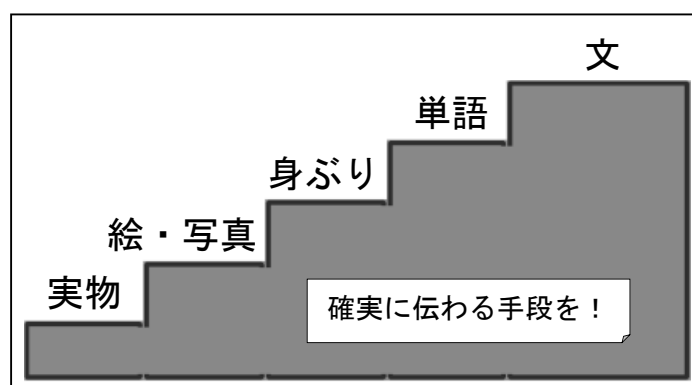


図2 受信（理解）の段階

発信（表現）にも段階がある（図3）。食べたいということ为例にとると、冷蔵庫まで手を引っ張っていく段階、袋が開けられないと袋の実物を渡すことで伝える段階、写真を渡す段階、食べたい物を指さす段階、身ぶりで伝える段階、ことばで伝える段階がある。発信に関しても、その人が無理なく確実に伝えられる手段を用いることが大事である。また、一つの手段ではなく、複数の手段を併用することも大事な視点である。写真など視覚的な手段を使っても、ことばが話せなくなるということはないため、その人に合った方法を探す方を優先する。

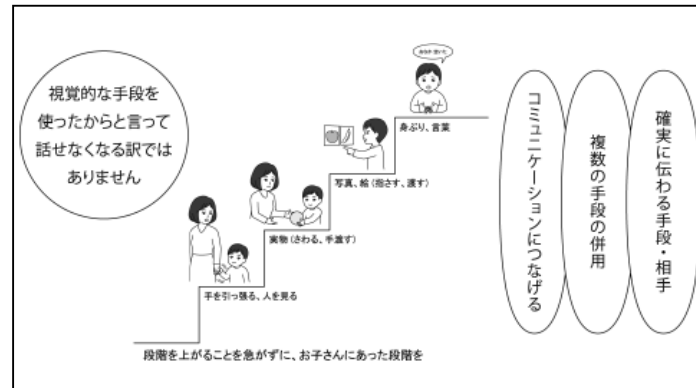


図3 発信（表出）の段階

自閉症スペクトラム（ASD）は、3つ組の障害と言われる。社会的相互交渉，コミュニケーション，イメージーションの3つの領域がセットになって質的な困難さがみられる場合，自閉症と診断される。3つの領域に困難さがあると，人と安定した関係を築くことが難しく，臨機応変に物事に対応することの困難さが生じる。時々刻々と変化のある日常生活は，不確定な要素が非常に大きく，自閉症スペクトラムの人にとっては，困難さが伴う。特にイメージーションの困難さがあると見通しが持てずに不安となるため，予告することによって見通しを持つことが大事な支援になる。

自閉症スペクトラムの人が感じている見通しの持ちにくさは，出口の見えないトンネルとイメージが重なる。私たちもトンネルの中において，出口が見えていれば前に進めるが，急に出口が見えなくなれば戸惑いや不安を感じる。自閉症スペクトラムの人は，イメージーション障害のため，より一層出口が見えにくく，トンネルが暗くなる状況に常日頃から陥りやすい。見通しが持てるように予告をするということは，自閉症スペクトラムの人への支援で不可欠である。コミュニケーションパートナーは，自閉症スペクトラムの人が抱える困難さを理解した上で関わるのが求められる（図4）。

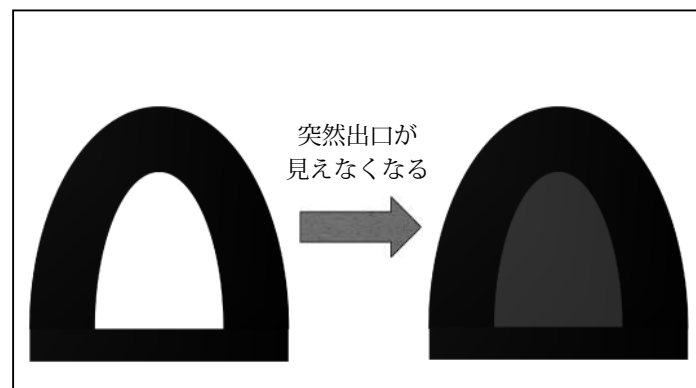


図4 トンネルのイメージ

2. 見通し, 予告について

以下は, 自閉症スペクトラムの人への大事な支援である, 見通しと予告について, 事例を交えながら検討する。

1) A君の場合 (写真を使って見通しを持つ)

A君は, 中～重度の知的障害を伴う自閉症の小学生で, 特別支援学校に通っている。ことばは, 「～もってきて」などの簡単な指示は理解できるが, 話はできない。日常でのコミュニケーションは, 手を引っ張るクレーン, 「ちょうだい」の身ぶりサイン, 写真や絵を渡すことで要求する。好きなものは, パソコンや電車である。好きな牛乳やお菓子は, パッケージを切り取ったものを渡して要求する。好きなパソコンをした
い時には, パソコンの絵カードを渡して許可を得る (図5)。

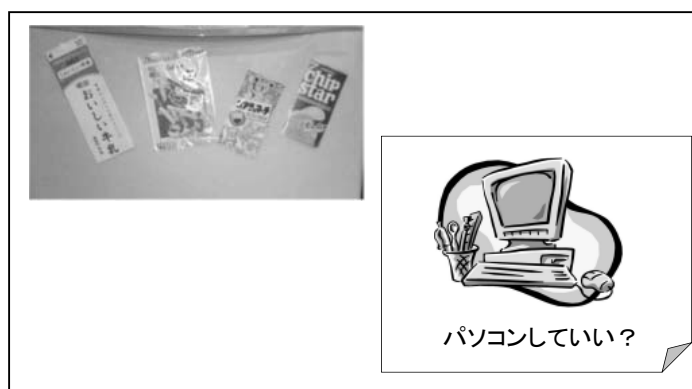


図5 写真や絵で要求

A君は, 学校が終わると, 放課後等デイサービスを利用している。18時に終了となるが, 玩具での遊びを終了することができない。スタッフが「おしまいだよ」「おうちに帰ろう」と伝えても動かず, 無理に引き離そうとすると泣く。A君にとって見通しが持てる対応とは, 見てすぐに理解ができる写真で次の予定を伝えることである。この場合は, 好きな電車のDVDの写真を用いて, 家に帰ったら見られることを伝えた。A君は写真を見ると, 遊びを終えて, 楽しそうに家に帰ることができた。

A君のこの状況をトンネルでイメージすると, A君にとってはことばだけで終了を伝えられるということは, トンネルの出口が見えず真っ暗になってしまったと考えられる。そこで, 電車DVDの写真を用いて伝えたところ, トンネルの出口が見え, A君は出口に向かうことができた (図6)。

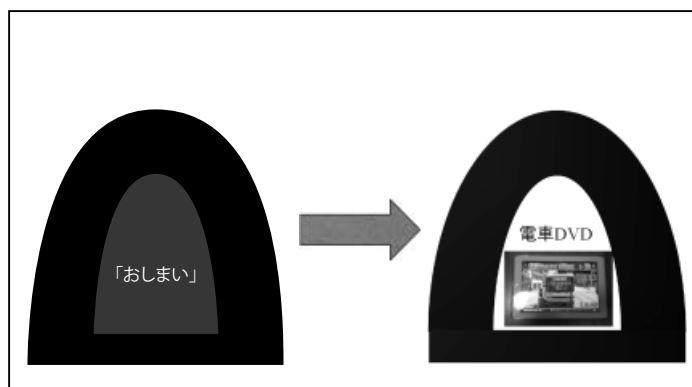


図6 見通しを視覚的に伝える

ポイントは、子どもの発達段階、興味に応じて具体的な方法で子どもに伝えることである。このような対応をするためには、保護者から次の予定を聴取するなど情報収集が必要である。

サポートシートとは、A君の状態像を明記し、コミュニケーションパートナーが情報を共有するためのものである。言語聴覚士（以下、ST）が助言をして、保護者が作成した。A君のことばの理解や表現、要求や拒否の仕方などコミュニケーション、好きなものなどを記入し、A君の概要が分かるようにまとめてある。より多くの人に目を通してもらえるように、必要な情報を絞ってA4で1枚にした（図7、別添資料参照）。

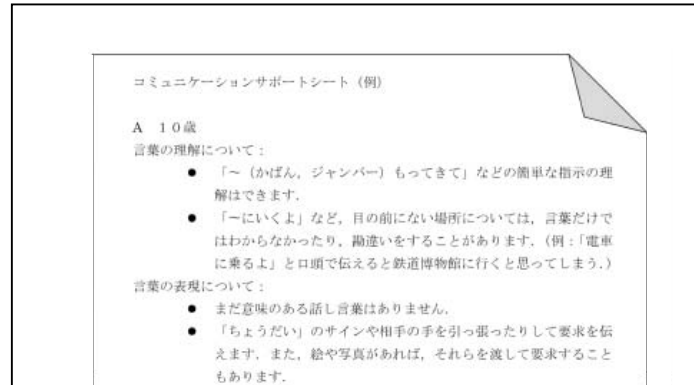


図7 サポートシート

時間の概念についても聞き取りが必要である。発達段階によっては、翌日の遠足を前日に予告すると、夜なのに今から行こうとすることがあり得る。その人がどの程度時間の概念を理解しているのかを保護者から聞き取り、その人に合った範囲で伝える必要がある。

2) B君の場合（実物、週間スケジュールを使って見通しを持つ）

子どもが見通しを持てるように、予告を習慣化ができるとよい。翌日の予定を予告する際には、翌日に幼稚園に行く時は、前日の夜に玄関先のフックに鞆や帽子をかけておく。また、翌日が休日の場合は、フックから幼稚園の物を外す。こういった方法で、翌日の予定を、実物を使って子どもに伝えることができる場合がある（図8）。

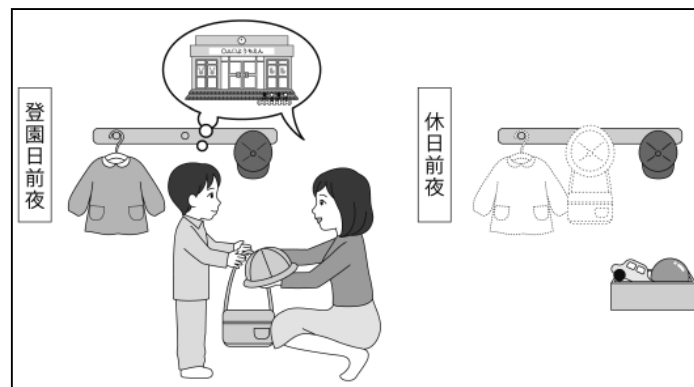


図8 予告行動の習慣化

B君は、単語の理解ができる段階である。B君は、翌日の予定が気になる子どもで、保護者に対し何度も予定を聞いてくるということがあった。保護者がその都度ことばで予定を伝えると、B君は一旦は納得する。しかし、時間が経つとB君は再び同じ質問を繰り返す。そこで、B君に確実に予定を伝えるために、実物を使用して予定を伝えるようになった。

保育園に登園する前日の夜には、玄関先に保育園で使うリュックと帽子を見えるようにセットして予告した。予告を始めると、自分で玄関先を見に行き確認するようになった。休日の前夜は、休み用のリュックと帽子を用意して伝えた。B君は休みを楽しむにしていたため、玄関先で休み用のリュックと帽子を見ると非常に喜ぶ様子が見られた。

B君の理解が2～3語文レベルになると、週の半ばで、いつ休みになるのかを気にするようになり、保護者に質問するようになった。そこで、休みがいつ分かるように週間スケジュールを導入した。保育園はコアラ組だったのでコアラのマーク、休みは家のマークで示した。B君は、スケジュールを見ることで、あと何日で休みになるのかをカウントして、自分で見通しが持てるようになった。土日に予定があれば、予定が書き込まれることもあった(図9)。

1	2	3	4	5	6	7
げつ ようび	か ようび	せい ようび	もく ようび	せん ようび	と ようび	にち ようび

図9 週間スケジュールで予告

3) C君の場合（カレンダーを使って見通しを持つ）

C君は、文の理解と表現ができる自閉症の子どもである。年中で入園し、幼稚園を非常に楽しみにしていたが、初めての夏休みで幼稚園に行かないことが分かると不安になった。保護者は、STと相談して、夏休みのカレンダーを作成し、予定を書き入れ、C君が見通しを持ち安心できるようにした。

それまでのC君は、予定がいつなのかを質問をしても、保護者がすぐに答えられないと、怒ることがしばしばみられた。カレンダーを導入すると、C君は保護者に聞くより見た方が確実だと思ったようで、よくカレンダーを見るようになった。ことばは、目に見えず形として残らないが、カレンダーに書き込まれた予定は形として残るため、いつでも確認できるメリットがある。見通しの持ちにくい自閉症の人には、物事の終わりや始まりを視覚的に明示することが重要である。C君は、幼稚園が始まる日を書き込むことで、夏休みの終わりと新学期の始まりを理解することができた（図10）。

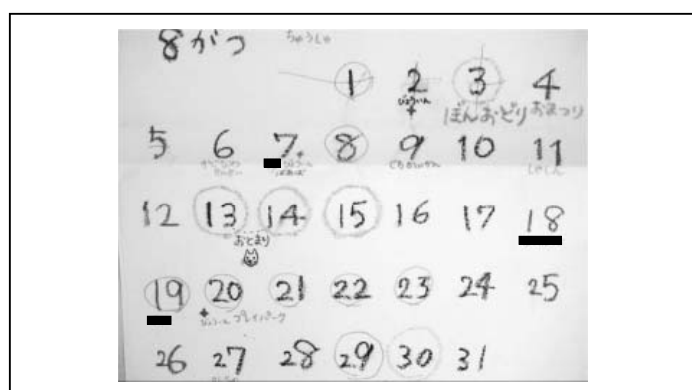


図10 カレンダーで予告

4) D君の場合（手描きの絵を使って見通しを持つ）

D君は、まだ文字は読めないが、会話のできる子どもである。定期的にSTの療育に通っており、療育後は保育園に行くことになっていた。しかし、ST療育後に、保育園に行くことが受入れられずに、大泣きをしてしまった。保護者がメモにイラストを描いて、D君に予定を伝えた。ノートがST、ひよこマークが保育園、家に帰って、好きなウルトラマンで遊ぼうと4つのイラストを保護者は描いて伝えた。保育園の後にも、楽しい予定があることを理解したD君は納得して保育園に行くことができた。このように簡便な予定の伝達であっても、その人が理解しやすい方法で、楽しみな見通しを伝えることができた一例である（図11）。

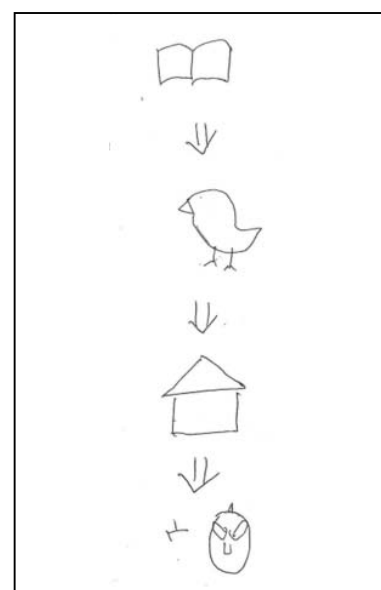


図11 手描きの絵で予告

予定は、本人に合った方法で見通しが持てるように作成する。視覚的に伝えるメリットは、見てイメージがしやすいことや、本人が予定を知りたいときにいつでも確認できる面にある。伝える内容が、本人にとって好きなことや興味のある物など“あかるい”ものであれば、受け入れられやすい。そのためには、本人にとって好きなことや興味の対象を、周囲が把握することが、支援につながる。自閉症スペクトラムの人とのコミュニケーションパートナーの役割の一つは、本人が安心して過ごすために、分かりやすく見通しを提示し続けることにある（図 12）。

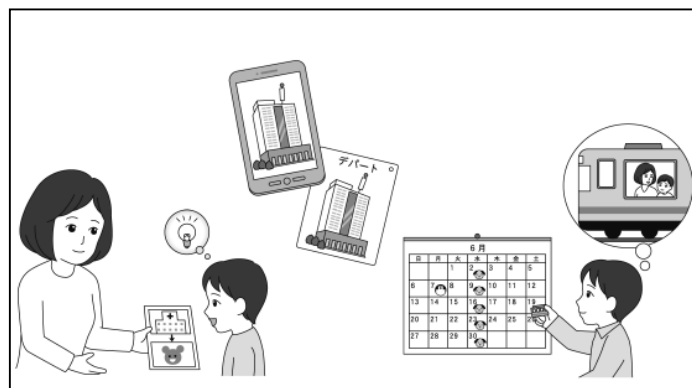


図 12 本人に合った方法で見通しを持つ

3. 会話について

自閉症スペクトラム人の会話は、その特性から、ことばが出ているのに会話にならない、エコラリアになる、会話が広がらない、人の話を聞かずに一方的に話を展開するということが課題にあがることが多い。

基本的な考えとしては、苦手なことばではなく、見て分かる視覚的な物を介して会話をするのである。例えば、動物園に行った感想をことばだけでたずねるのではなく、パンフレットを広げて話をすると、パンフレットが視覚的な題材となり会話が広がりやすい。

見て分かるという点で、写真も会話の材料として使いやすい。携帯電話の写真機能やデジタルカメラも視覚的な材料になるが、時として機械いじりなどの遊びになることがある。そのような場合は、プリントアウトした写真をアルバム形式に綴じると、会話に意識が向きやすくなることもある。また、話した内容を鉛筆で紙に書くことも、書かれた内容が手がかりとなり、話題を視覚的に共有できる（図 13）。

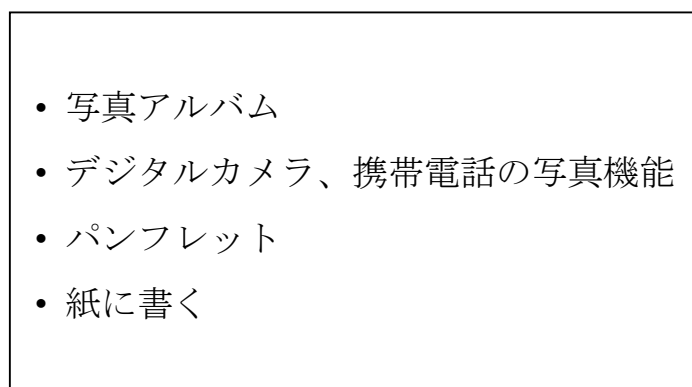


図 13 会話の材料を用意する

E君の場合（紙に書きながら会話）

E君は、ダウン症で自閉傾向のある小学校6年生で、特別支援学級に在籍している。ことばの理解は文レベルまでであるが、発話は非常に不明瞭で伝わりにくい。読み書きが学校での指導もあり、広がっている。STの療育では、E君の苦手な発話ではなく、得意な読み書きを使って、コミュニケーションを図るように支援している。

学校が終わってからSTの療育に来ているが、今日の学校の様子を聞いた際の会話を以下に述べる。①STが給食は何だったかを聞き、E君がおにぎりと話すので、STが紙に書き込んでいく。②STが授業の内容を聞くと、C君はことばで答えるが、STが聞き取れないとE君は文字で音楽と書く。③STが歌や楽器について書いて聞くと、E君は先生がピアノを弾いたということを書いている。④さらに、図書タイムは、キョウリュウジャーを読んだとE君は書く。⑤話をしていると話がどんどん逸れていくというものE君の特徴である。恐らくキョウリュウジャーの話題から駆動されてだと思われるが、10月6日曜日8時に新仮面ライダー鎧武（ガイム）が始まるということを唐突に書いた。⑥その際には、話題が学校のことであることをSTが書いてあるもので確認すると、E君は体育で第二グラウンドに行ったと言い、STが書くことで話題が戻った。⑦STが第二グラウンドって何かを聞くと、本来の校庭が改修中で、向かいの敷地を借りており、道路を渡っても行けるが、危ないから歩道橋を渡って行くということをE君が描くことで答えた。E君のことばでは伝えきれないような内容も、描くことで表現することができた（図14）。

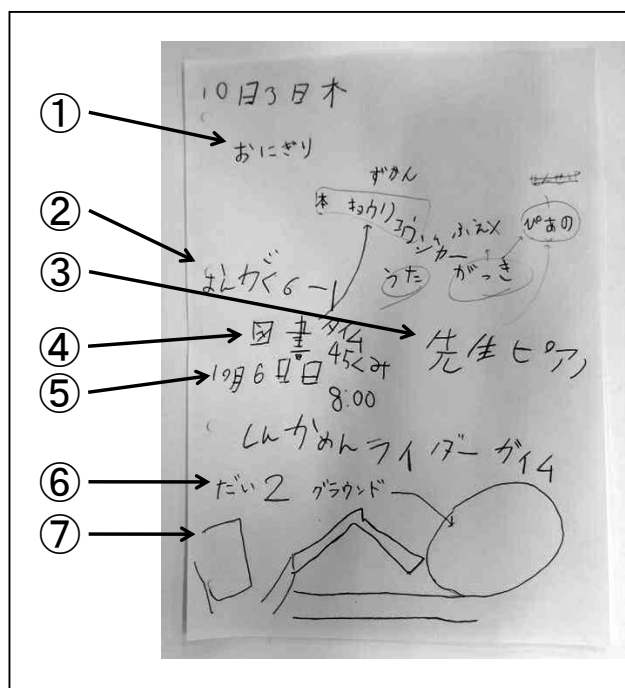


図14 話を書きながら会話

自閉症スペクトラムの人の会話は、興味の対象が限られ、独特の視点を有していることがあるので、会話の話題を何にするかなどの配慮が必要である。コミュニケーションパートナーが聞きたいことだけを聞くのではなく、本人が話したい内容を話題にしてやりとりを楽しむという発想が、会話を広げるポイントの一つになるのではと考える。

4. まとめ

自閉症スペクトラムの人とのコミュニケーションについて、事例を通して支援を考えた。自閉症スペクトラムの人は、見通しの持ちにくさから不安や混乱に陥ることがある。そのため、次の予定を伝えて本人が見通しを持てることが大事な支援となる。本人の発達段階や興味に応じて具体的に伝えることが必要であり、実物や写真など視覚的な手段を用いて、本人にとってトンネルの出口となるような“あかるい”見通しを伝えることが有効である。

会話はことばでのやりとりが主となるため、自閉症スペクトラムの人にとっては抽象的で分かりにくいものであると考えられる。見て理解するという自閉症スペクトラムの人の特性を生かし、写真や文字など視覚的なものを介すと会話が広がるきっかけとなる。自閉症スペクトラムの人の興味の偏りや独特な認知があるため、話題を本人に合わせるという配慮も不可欠である。

コミュニケーションは双方向であり、コミュニケーションパートナーが担う役割は大きい。日常的に自閉症スペクトラムの人と関わるコミュニケーションパートナーは、自閉症スペクトラムの特性や発達段階を理解し、共通した認識を持ち、それぞれの人に合った対応を工夫できる存在であることが期待される。

肢体不自由児とのコミュニケーションの工夫

千葉県千葉リハビリテーションセンター 言語聴覚士 知念洋美

1. はじめに

肢体不自由児に関わる人は、子どもの健康管理として、「のどかわいてない?」「トイレはだいじょうぶ?」「どこか痛いところはない?」と水分摂取や排泄、体調チェックなどの生理的欲求に関するやりとりを優先する傾向がある。元気に日々を過ごすために健康管理は重要である。しかし同時にコミュニケーションパートナーとしては、コミュニケーションの楽しさを共に体験し、育てる視点も大切である。

本稿では、肢体不自由児とのやりとりそのものを楽しむコミュニケーションの工夫について、5人のエピソードを通して報告する。

2. コミュニケーションの工夫例

1) Aさん(8歳, 脳性まひ) ~ 「はい」「いいえ」の表現

Aさんは8歳の脳性まひで、自分で姿勢を変えたり、物にさわることができない。周囲の人の話しているご飯、お風呂、終わりなど簡単な単語の理解はできるが、発語はない。

当初(6歳頃)Aさんは「お茶もっと飲む?」「もう要らない?」と尋ねられると、どちらにも「アイ」と笑顔で答えていた。これは、Aさんが理解していることばの数がまだ少なく、質問を聞いて正しく理解することは難しかったためである。そこで理解語彙を増やすために、(a)生活場面で「おしぼりどうぞ」「(くつを)はきますよ」と物の名前や動作を表すことばかけを丁寧にしたり、(b)「ポットはどこでしたっけ?」と尋ねて、視線で探すよう促した。その結果、Aさんは理解できることばの数が増え、相手の質問が適切に理解できるようになった。Aさんの「はい」の応答は「アイ」と返事をしてにっこり笑い、「いいえ」の応答は、返事をせずに黙っているかたちになった。

一般的に返事をせずに黙っていると、質問を理解していない、あるいは返事を保留、さらには質問を無視していると誤解される可能性がある。そこで何らかの動作で「いいえ」の意思表示ができるように、理学療法士(以下、PT)と相談して、顔をそむけて視線をそらす動きをAさんの「いいえ」の応答に決めた。この「はい」「いいえ」2つの応答を写真に撮って解説を書き、ラミネート加工をして、車いすの後ろに提げることによって、関わる人がAさんの応答を共通理解できるようにした。

肢体不自由の子どもでは、Aさんのように、そのひと独自の 방법으로応答する場合もあるので、関わる場合にはまず最初に家族と「はい」「いいえ」の応答の仕方を確認するとよい。その場で実際のやりとりを観察したり、写真を撮って他のスタッフと共有するのもよい。Aさんのように周囲の人が話すことばを理解できる人は、「はい」「いいえ」の応答を確実にする働きかけができるが、まだことばを理解できない人にはどう対応したらよいだろうか。支援するときには、たとえば「ボールで遊びます」とことばと同時にボールを見せながら話しかけたり、その場の状況を見渡せるように一度姿勢を起こして「見えますか?」と配慮するのもよいだろう。「もう1回やりますか?」とボールを見せながら尋ねたときには、その人の表情や声、体の筋緊張などをよく観察して、関わる人がその人の快・不快の感情を読み取る。そして「やりたいんですね」「もうやりたくないんですね」とその人の代わりに表現することによって、「はい」「いいえ」の応答の代わりと

する。

その後Aさんは12歳頃、理解力が伸びて、周囲の人の話す3語文が正しく理解できるようになり、「はい」「いいえ」に続く第3の応答を教えることができた。やはりPTと相談し、目を上に向けて考える表情をするのがAさんの第3の応答、「考え中」となった(図1)。



図1 Aさんの「考え中」

これによって、Aさんは判断を保留し、関わる人に対して「あなたの意見はどう？」とAさんから尋ねるきっかけを作ることができた。また視線で選ぶコミュニケーションボードを作成した(図2)。

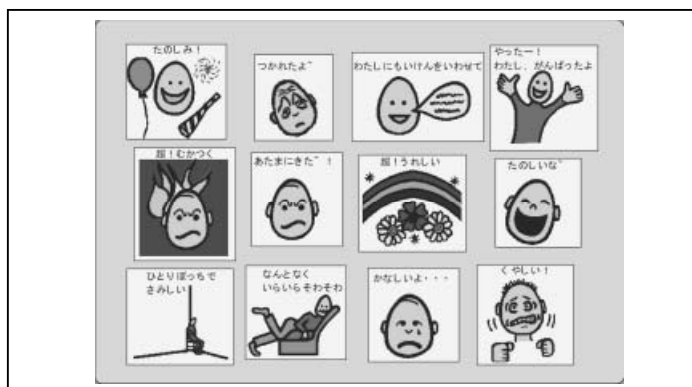


図2 Aさんの透明のコミュニケーションボード

中学部～高等部に在籍した頃、「お母さん、超むかつく！」とコミュニケーションボードと発声で不満を表現し、母のがっかりした表情を見て、きょうだいとともに歓声を上げ、ストレスを発散した。このことによって、いらいらして泣くことや、体の筋緊張を高めて痛みを訴えることが減少した。

2) Bさん(17歳, 脳性まひ)～話題を共有するシート

Bさんは17歳で筋緊張の変動が見られる脳性まひである。自分で姿勢を変えることは難しい。座位保持いす上で作業のための姿勢を長く保持することが難しく、手や視線で選んだり、操作することが安定して行えない。3語文を聞いて意味を理解することができる。「ヤダ」「ハヤク」などの簡単なことばが数語言えるときもある。また視覚認知障害があり、絵や写真のコミュニケーションボードが実用化していないため、日常のやりとりは質問に対して「はい」「いいえ」を発声と表情で応答することが中心である。

Bさんは定期的に地域の施設に短期入所をしており、入所期間中に職員とコミュニケーションを楽しめる

よう、施設の職員と話題を共有するためのシートを何種類か作成した。Bさんの興味関心はテレビドラマであり、家で好きなドラマを録画して繰り返し見ているため、ドラマの登場人物やドラマにまつわる家族のエピソードなどをテーマごとにシートに作成し、ラミネート加工して短期入所の際に持参した。シートは、関心を持った職員と笑いながらドラマのストーリーについて話すきっかけとなった。

今後は、新しいシートの作成者を広げる働きかけが必要と思われた。他にも利用した施設のパンフレット、広告やチラシ、チケット、関わる人が描いた絵メモなどをファイルに収納して持ち歩くことや、次項で述べるコミュニケーションの道具を使うのも一手である。

3) Cさん (14 歳, 神経筋疾患) ~動画で報告表現

Cさんは神経筋疾患がある14歳で、自力で寝返りができる。2語文の理解が可能で、「オ、ア、オ、オ、オ、ア、イ、ア、ン」(＝おはようございます)のようなゆっくりとした、不明瞭で紋切り型の発語があるが、慣れた人でないと通じない。VOCA (ヴォカ: Voice Output Communication Aid; 音声出力コミュニケーションエイド) アプリの使用を目的に iPod touch を購入したが、その目的では限定した場面でしか使わなかった。その代わりに、ビデオやゲームの機能を用いていた。例えば、Cさんは、自分の活動の撮影を家族に依頼し、家庭で再生し、楽しんでいた。このことに学校の先生が着目し、学校での活動を毎日 iPod touch でビデオ撮影してビデオの連絡帳として活用し、Cさんが家族やヘルパーに見せて報告する活動につなげた。

4) Dさん (16 歳, 脳性まひ) と Eさん (30 歳, 神経筋疾患) ~会話の聞き取り

Dさんは16歳で筋緊張の変動が見られる脳性まひである。自分で姿勢を変えることは難しい。3語文以上の理解が可能と推測されるが、発語はない。また視覚認知障害があるため、絵や写真に描かれているものを読み取るのが難しい。Eさんは30歳の神経筋疾患で、自分で姿勢を変えることは難しい。気管切開をして人工呼吸器を装着しており、発声ができない。Dさんと同様に3語文以上の理解が可能と推測されるが、発語はない。また視覚障害を重複する。2人に共通するのは、言語理解レベルが高く、共感性を持って大人とのやりとりを好むことである。2人には会話で頻用することばのリストを作成し、Dさんには日記のシート、Eさんには会話の聞き取りシート (図3) として使用している。

さんのひとことシート		
年 月 日	曜日	一緒に書いた人 ()
誰のこと・誰と?		
わたし	ママ	ババ
友だち	()	()
指導員さん	()	()
看護員さん	()	()
お医者さん	()	()
PT	()	()
ST	()	()
その他	()	()
今日は何の話がしたいの?		
①音楽	①読書	
②体操	②お散歩	
③洋服	③くすり	
④おしゃべり	④絵画 (画ばい・パーカッション・模写)	
⑤お風呂	⑤DVD	
⑥遊園地 (ゲーム・大ホール)	⑥手紙	
⑦ごはん	⑦行事 (誕生日・レタイン・クリスマス)	
⑧お家	⑧外出	

図3 Eさんの会話の聞き取りシート

決まった順序でことばのリストを読み上げ、「はい」「いいえ」の応答をシートに記録することによって、Dさん、Eさんの背景となる情報を詳しく知らない聞き手も臆せずやりとりに参加できる。またDさん、Eさんと親しい聞き手にとっても、思い込みに依らずにDさん、Eさんの思いを聞き取ることができる。

3. コミュニケーションの道具

肢体不自由児がよく使うコミュニケーションの道具は、ローテク・デバイスとハイテク・デバイスの2つに大別される。ローテク・デバイスはその形状から、コミュニケーション・カード、コミュニケーション・ボード、コミュニケーション・ブックなどと呼ばれる。また筆記具で書く筆談や絵メモも今日からすぐに実践できる手段である。ハイテク・デバイスには、VOCA と呼ばれる専用の携帯型会話補助装置のほか、デスクトップ、ノート、タブレット型 (iPad など) のパソコン、携帯情報端末 (iPod touch など)、携帯電話、スマートフォンなどの便利な日常電子機器がある (図 4)。

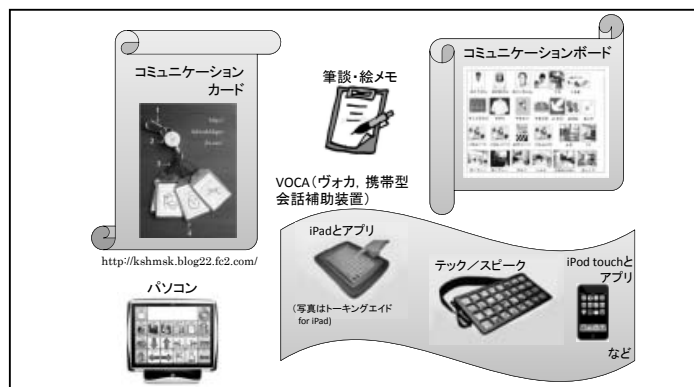


図 4 コミュニケーションの道具いろいろ

道具をフィッティングするときには、①ことばの理解力、②視覚認知、③運動能力、④疲れにくい姿勢や道具の配置、⑤使う場面に合わせたメッセージの選択などを考慮する。

コミュニケーションの道具は、相手や場面が変わるたびに、関わる人が手を加え、子どもは戸惑いながら少しずつ適応して対応ができるようになる。そうして、実用的なコミュニケーション能力を身につけ、高めていく。

4. サポートシート・サポートブック

サポートブックは、本人、家族、関わる人が情報を共有することによって、楽に生活を楽しむためのツールである。自閉症の子どもを持つ家族が最初に考案し、紹介している^{注1}。サポートブックの要旨を1枚のシートに集約して、一目でサッと見て支援の要点がわかるように作成したものがサポートシートである。肢体不自由児のサポートシートでは、前項で紹介したコミュニケーションの工夫や身体面での介助方法などを載せるとよい (別紙サポートシート参照)。

5. おわりに

肢体不自由児とコミュニケーションを楽しむ工夫について報告した。道具は万能ではないが、適切な道具を用意することで、子どもと周囲の人がコミュニケーションを楽しむことができる。

注1 丸岡玲子：サポートブックの作り方・使い方—障害支援のすぐれもの (おめめどうライブラリー (Vol2)) おめめどう. 2005

Aのサポートシート

問いかけに対して「はい」(いいよ、やりたい、合ってる、ください)「いいえ」(だめ、いやだ、ちがう、いらない)「考え中」(どっちでもいいときにもこの表情をします)は、下の写真のように答えます。



注(実際にはAさんの写真を使用しました)

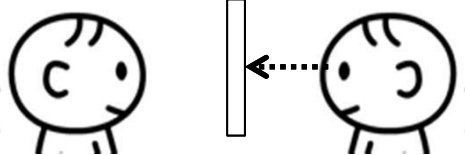


妹の影響でアイドルの〇〇が大好きです。木曜日の番組は欠かさず見えています。△△くんが出てくると大喜びです。



ドーナツにはまっています。土日はドーナツショップに行こうとコミュニケーションボードで父に要求します。

コミュニケーションボード



透明のコミュニケーションボードは、向かい合って顔と顔の間に置き、Aの視線が止まったところで「〇〇？」と聞いてください。合っていると「アイ」と答えます。

うれしくて体が突っ張ったときは、落ち着いた声で「フーしてごらん」と声をかけて力が抜けるのを待ってください。



(3) セミナーのまとめ

当日のアンケートを基にセミナーのまとめを考える。

I. アンケート回収率

参加者数159名中、120名より回答を得ることができた。回収率は75.5%であった。

II. アンケート項目

項目は、時期や時間など運営に関して、講演会の内容全般および各講演に関して、セミナー全体の感想および今後取り上げて欲しいテーマについての質問を設定した。

III. 結果

①セミナー参加者の職種

参加者の職種の内訳は図1の通りである。

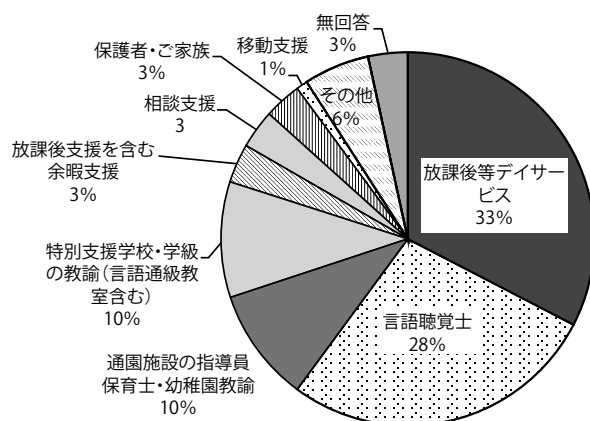


図1 参加者の職種内訳

②運営について

講演会の開催時期・時間と会場および当日の進行に関する満足度を4段階評価で尋ねた。それぞれの結果を図2～図4に示す。

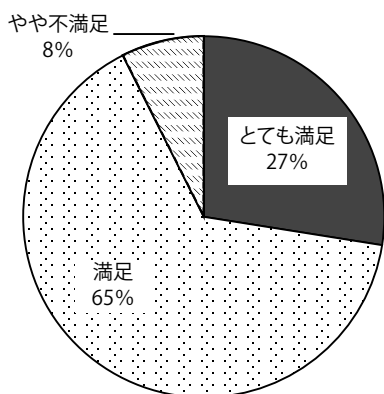


図2 開催時期・時間について

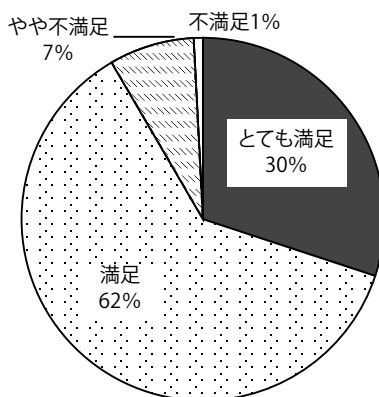


図3 会場について

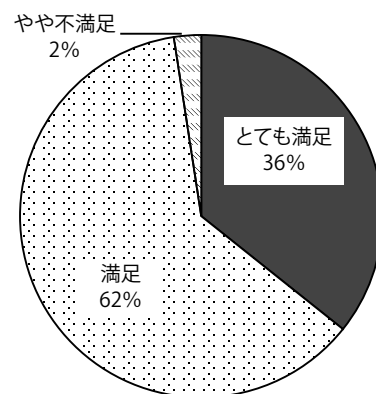


図4 当日の進行について

③内容全般について

講演会の内容全般に関する満足度について、図5に示す。

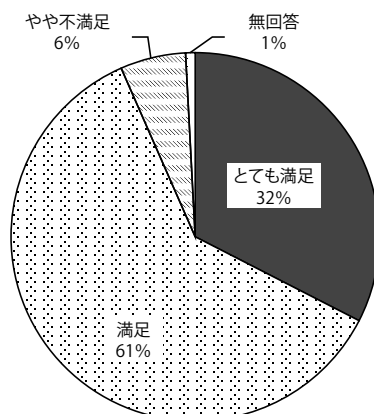


図5 内容全般について

- a. 「とても満足」「満足」と回答した参加者に対して、どのような点がよかったかを具体的に質問した。結果を表1に示す。

表1 どのような点がよかったか（複数回答）

よかった点	回答数
役立つ情報が得られた	95
生活や活動に役立った	66
スキルアップに繋がった	51
交流、情報交換が図られた	4
問題・不安の解消に繋がった	14
その他	26

「よかった点」に関する自由記述では、運営全体について、参加者自身の日常における発達障害児者との関わりを振り返って、具体的な情報が得られたという感想、などの回答が見られた。

以下、()内は回答者の所属や職種を表す。

【運営全体への感想】

- ・資料がカラーでとても見やすく、分かりやすかった。事例がもりこまれていたり、参考資料の展示があるのもありがたかった（放課後等デイサービス）
- ・1回の講演時間が45-60分と時間的に集中して拝聴できました（言語聴覚士）
- ・パワーポイントの資料が、そのまま印刷配布されたので、記録するのもスムーズでわかりやすかったです（特別支援学校・学級の教諭—言語通級教室含む）

【参加者自身の日常における発達障害児者との関わりを振り返っての感想】

- ・日常のかかわりについて振り返り、整理する機会となった（特別支援学校・学級の教諭一言語通級教室含む）
- ・担当児に対する対応を丁寧に考えていく必要があること、そのためにその子の発達段階をしっかりと評価することを再認識しました（言語聴覚士）
- ・今までの支援で、間違っただけではなかったかな？とホッとしました。それと、問題視されていた子どもたちも、支援者のあり方で全然違った姿を見せてくれるんだな、と改めて思われました（放課後等デイサービス）

【具体的な情報が得られたという感想】

- ・具体的な事例により、支援するにあたり、とても参考になりました（放課後等デイサービス）
- ・発達障がい児とのコミュニケーションの具体的な方法について教えていただいたことがよかったです（特別支援学校・学級の教諭一言語通級教室含む）
- ・「発達段階を踏まえて」の講演を聞きながら、再認識させられたと思います。何回も言い伝え、根気良く向き合っていかなければと、改めて感じました（放課後等デイサービス）

b. 「やや不満足」と回答した参加者に対して、どのような点がよくなかったかを具体的に質問した。

結果を表2に示す。

表2 どのような点がよくなかったか（複数回答）

よくなかった点	回答数
役立つ情報が得られなかった	2
生活や活動に役立たなかった	1
スキルアップに繋がらなかった	2
交流、情報交換ができなかった	1
問題・不安の解消に繋がらなかった	3
その他	6

「よくなかった点」に関する自由記述では、より具体的な内容を求めて参加したことが推測される感想および開催時期についての感想がみられた。

- ・実際の支援場面の映像などをもっと盛り込んでいただけると良かったかなと思います（放課後等デイサービス）
- ・基礎知識は持っているのですが、具体的な例をたくさん教えていただきたかったです（通園施設の指導員・保育士・幼稚園教諭）
- ・コミュニケーションのとり方についてももう少し具体例をあげて教えていただけると良かったです（その他）
- ・研修日は、日曜日ではなく土曜日の方が良い。雪が降らない時期がよい（放課後等デイサービス）

③各講演について

3つの講演ごとに「役に立つか」「わかりやすいか」について、それぞれ4段階評価で尋ねた。

- ・「発達障害児とのコミュニケーションー発達段階を踏まえてー」

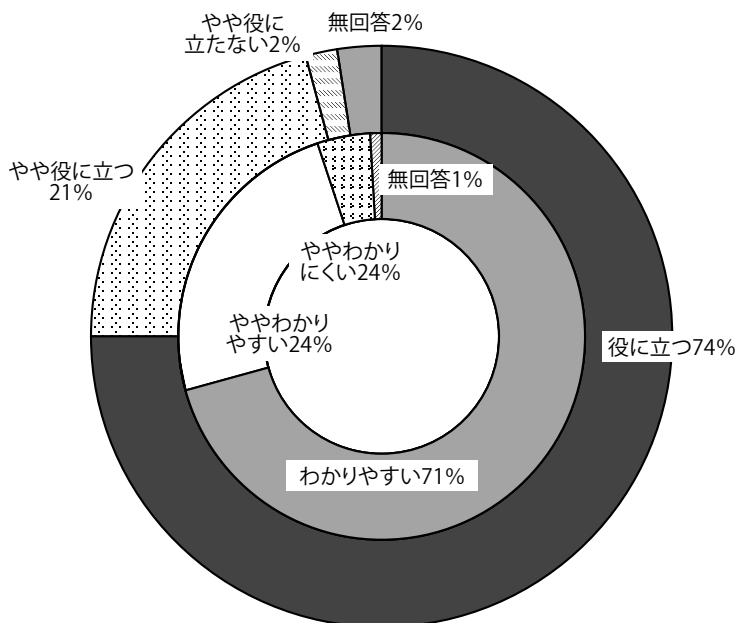


図6 「発達障害児とのコミュニケーション」

- ・「自閉症スペクトラムの人とのコミュニケーション」

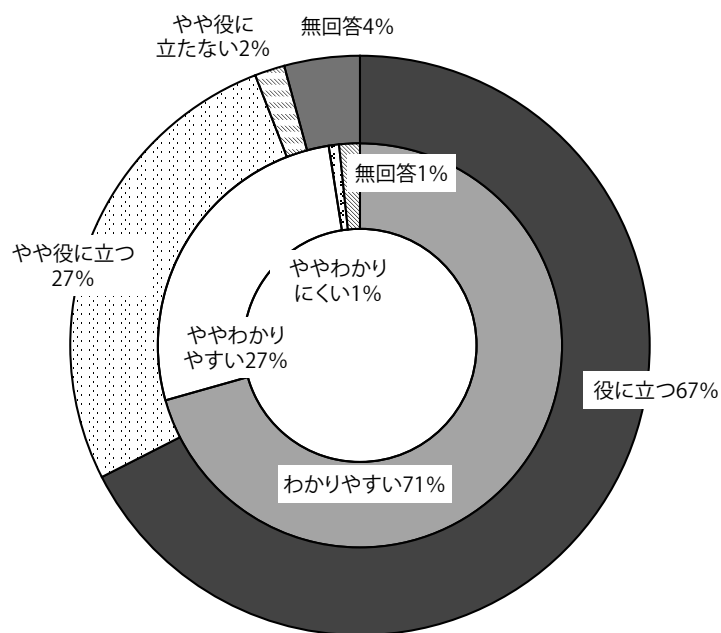


図7 「自閉症スペクトラムの人とのコミュニケーション」

・「肢体不自由児とのコミュニケーション ―道具と工夫―」

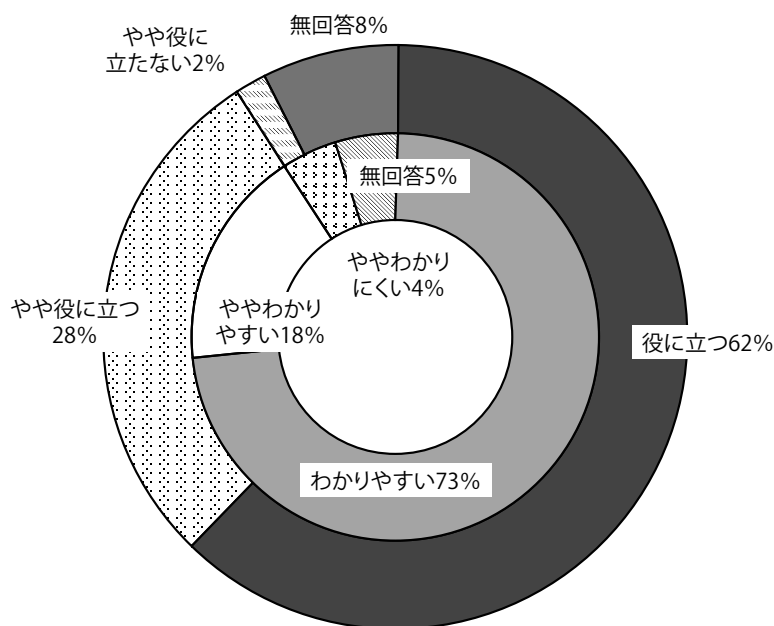


図8 肢体不自由児とのコミュニケーション

④セミナー全体の感想，今後取り上げてほしいテーマや活動等（自由記述）

セミナーを通して参加者が感じたこと，および現在課題と感じている内容について多くの意見が寄せられた。

【感想】

- ・自閉症を持つ親です。わかりやすい説明で，いろいろとやった方が良かったと思っていた手段もなかなかやらなかったのですが，「やっぱりやった方が良かった」と背中を押してもらった感じです。がんばってみます。ありがとうございました。（保護者・ご家族）
- ・自分のかかっている子どもの指導については直接参考になる講義ではなかったが，「コミュニケーションということはどういうことなのか」「何をめざしていくのか？」ということについて，また，コミュニケーションに障がいを持つということはどうなる社会的不利益を持つのかよくわかった。（特別支援学校・学級の教諭一言語通級教室含む）
- ・日常支援の中で実践していることがあるが，なぜそれがいいのかがわかりました。また，深めるためのヒントがたくさんありました。ありがとうございました。（放課後等デイサービス）
- ・個々に応じた支援を再度反省し行っていきたい。今後，道具を使用する利用者が利用するかもしれない。その時，利用者にあった道具を与えることにより利用者の生活を大きく変えるということを学ぶことができ，とても良かった。その時の支援は本当に大変だと思いました。ありがとうございました。（放課後支援を含む余暇支援）

【今後取り上げてほしいテーマや活動】

- ・自閉症スペクトラムの人が会話ができるようになった後の会話を深めたり，文章理解力やイメージを広げる力を伸ばしたりするためのヒント（特別支援学校・学級の教諭一言語通級教室を含む）

- ・東北地方（近隣県）で無料のセミナーがあると参加しやすいです。LD, ADHD の子供との関わり方できくに学習面の支援方法が知りたいです。書籍よりも講話の方が支援のイメージがしやすいです（放課後等デイサービス）
- ・不適切行動（他害, 自傷）が言葉の表出の発達が遅れているために身につけてしまっている子への対応, 改善への支援方法を学びたいです（放課後支援を含む余暇支援）
- ・①ロールプレイを取り入れた, 障害別の対応の検討会, ②親から子への虐待はよく話題になるが, 子どもが体格的に大きくなって力をつけた時, 親に対する暴力が出た時に, どういう対応, または伝え方をしていたらいいのか!?（社会福祉士, 相談支援専門員）

IV. まとめ

セミナー全体について「とても満足, 満足」との参加者が9割となった。「日々を振り返ることができた」「必要性を再認識した」および「具体的な方法を知ることができた」といった記述が多く見られた。今回のセミナーが, 言語発達障害児・者に関わる様々な職種の方々に「発達段階や障害特性を踏まえたコミュニケーションについて考えるきっかけ」になることができたと推測される。一方で, 「やや不満足」との参加者からは「具体的な方法を多く知りたい」という意見が挙げられた。経験年数や研修歴などの背景によってセミナーに求められる内容が異なるものと考えられる。

【参考】新聞記事紹介



言語発達障害の特徴などを理解 郡山でセミナー

知的障害、自閉症などにより言語発達障害を抱える子どもと関わりのある家族、地域住民らを指す「コミュニケーションパートナー」を対象とした育成支援セミナーは十九日、郡山市の総合南東北病院NABEホールで開かれた。

演題は「放課後や休日のコミュニケーションを豊かにするために」。障害の特徴に理解を深め、双方の意思疎通を円滑にするのが目的。家族や教育関係者ら約二百人が出席した。

大学の専門家らが、子どもの発達に応じた対応の在り方などを説明した。引き続き、家族などを対象とした個別相談会が開かれた。

NPO法人言語発達障害研究会（所在地・千葉県）の主催。県や県言語聴覚士会などの後援。

福島民友新聞 2014年1月21日掲載

言語発達障害を理解 郡山でセミナー

NPO法人言語発達障害研究会のコミュニケーションパートナー育成支援セミナーin福島は19日、郡山市の総合南東北病院で開かれ、言語発達障害児に関わる家族、医療、教育関係者ら約170人が参加。同NPOの倉井成子理事長をはじめ言語聴覚士3人がそれぞれ、発達段階や障害の特性に応じた子どもとの関わり方やコミュニケーションの工夫を紹介した。



講演する倉井理事長

らが障害児との具体的なコミュニケーション方法に理解を深めた。

約170人が参加。同NPOの倉井成子理事長をはじめ言語聴覚士3人がそれぞれ、発達段階や障害の特性に応じた子どもとの関わり方やコミュニケーションの工夫を紹介した。

福島民報新聞 2014年1月22日掲載

4

相談会

(1) 相談会概要

相談会申込者は福島県内在住者4組、内3組が当日参加し、各々言語聴覚士（以下、ST）と個別相談を実施した。以下相談者をA,B,Cとし、相談内容を記す（表1）。なお、本稿では、個人情報保護の観点より、相談者の記載に関しては匿名性が保たれるよう十分配慮し、一部内容に変更を加えている。相談者からは、内容掲載の承諾書を得ている。

表1 相談者リスト

相談者	相談対象者	年齢
A 施設職員	脳性まひ	30歳
B 家族（施設職員同席）	自閉症、精神遅滞	6歳
C 家族	精神遅滞	4歳

相談者は全員福島在住であった

【個別相談 相談者A】

相談者Aは支援事業所の専門家で施設職員である。

相談対象者は、事業所を利用する成人であった。脳性まひ（アテトーゼ型）で運動制限や不随意運動があり、知的障害はない。日常のコミュニケーションは道具を使用せず、五十音話法を用いていた。パソコンを使用して、原稿やレポート等を打つ作業を行っており、操作はジョイスティックで行っていた。

相談内容は、(1) 効率的なパソコン入力と(2) 五十音話法に代わる手段の検討であった。

具体的には、(1) パソコンの使用は、ジョイスティックのコントロールが正確にできず、対象者が1人でできる方法を模索しているとのことであった。(2) 日常のコミュニケーションは、対象者のYes - No反応が、不随意運動のために支援者にとって見分けが難しい面があること、そのため、五十音話法はかなり時間がかかっており、本人の能力が最大限に引き出されていないのではないかと相談者は判断していた。

相談結果としては、まず相談者と対象者のニーズを各々確認した上で、ハイテクツールとローテクツールを場面ごとにうまく使い分けていくことを助言した。(1)については、ハイテクツールのパソコンの操作方法、スイッチの種類、スキャン方法を検討し、ジョイスティックを1スイッチに変更し、オートスキャンのフリーウェアを試すことになった。(2) ローテクツールでは、セミナーで紹介した会話を聞き取るための支援シートの見本を後日送り、それを基に相談者が作成することとなった。運動の正確さと入力の効率性を評価しながら、対象者の意見を聞いて、使用する手段を選択するのが望ましいという点も話題に上がった。

助言のポイントは、1) パソコンの現在のインターフェースの使用状況を基に、新たな入力方法、ソフトウェアを評価しながら使うこと、2) 現在の主たるコミュニケーション手段の補助として支援シートを作成することであった。相談者が対象者を的確に評価しているため、相談は非常にスムーズに進行した。

【個別相談 相談者B】

相談者Bは療育機関に通う子どもの家族であり、療育機関の担任も同席した。

相談内容は、(1) 家族への他害への対応をどうしたらよいか、(2) 場面の切り替えが難しい、というものだった。

具体的には、(1) 帰宅後に、自分の遊びが終わると家族に他害を始め、怒られると他害がエスカレートしてしまうということであった。(2) 家庭では入浴が好きだが、それまで行っている遊びを止めて、お風呂に行くことが難しい。また療育機関では、保護者が迎えにいった時に、家に帰るのが難しいということであった。

相談結果としては、(1) について、自分の遊びが終わり、手持ち無沙汰になると他害になりやすいので、

遊びに飽きたタイミングで、本人の好きな遊びを提示してみることを提案した。また、注意すると逆にエスカレートし、悪循環になりやすいようなので、家族内で対応を共有することを伝えた。そのためには、本人の状態について、家族と一緒に専門機関の担当医や、担当セラピストから説明を受けることも提案した。(2)については、先が見えないことでの混乱、次の楽しい見通しがもてないことなどが問題の背景、要因にあることを説明した。そして、本人にわかりやすい実物を用いて、本人の好きな、楽しみな予定について伝えていくように助言をした。例えば、入浴のときは、本人が浴槽で遊ぶ玩具と一緒に提示することを提案した。また、療育機関から帰る場面では、帰りに寄る店で買っている、本人の好きなパンの包装袋などを提示することを提案した。

助言のポイントは、1) 問題となっている行動の背景、要因について情報を収集し、共有した上で、問題行動が起きにくい状況を作ること、2) 家族というコミュニケーションパートナー（祖父母など）間での対応の共有の必要性、3) 本人にとって楽しみな活動を分かりやすく提示することで、本人が明るい見通しをもつこと、の重要性であった。

【個別相談 相談者C】

相談者Cは、幼稚園に通う子どもの家族であった。相談内容は、話せるためのサポート、話せない場合のサポート、将来しゃべらないままかを知りたいということであった。子どもの概況は、診断名が精神遅滞、生下時の体重は600グラム未満で、現在まで入退院を繰り返している。幼稚園（障害児ケア）に通っており、療育は理学療法士（以下、PT）月4回、作業療法士（以下、OT）月2回。STは、昨年および一昨年の評価のみで、定期指導は受けていない。

相談では最初に、(1) 子どもの現在の様子の確認と療育内容の整理を行った。現在、運動面は、床の継ぎ目や、床やマットの色が変わるところで動かなくなり、安全な場所しか歩かない。食事面は、全介助、過敏が強く（臭覚以外すべて）、固形食は全く食べない拒食状態である。PTは、「立ち上がりの訓練」、OTは、「つまむ、バランス、口腔内の過敏を取る、先生との関係づくり」の指導を行っている。STの昨年の評価では、「人の存在をわからせるところから始めよう」と助言があった。心理は、部屋が怖く、直接検査ができず、問診による検査のみ実施した。聴力検査では、聞こえにくい音域がありそうで、定期的に検査を実施しているが、COR検査でびっくりし、検査を怖がる状態であった。視覚面は、未熟児レーザー治療をしているとのことであった。次に、(2) 発達状況の評価を実施した。遊びの内容は、光るおもちゃ、絵本（3冊）、音楽（音楽療法には集中）、友達の遊びを見ている、であった。サインは「じょうず」のみだが、やってほしいことのために周りの人を動かしたい様子がみられる。サインをするときは、視線が合わない様子もみられている。ご両親からは、入院生活を繰り返しているが、少しずつ成長しており、これからも入院が決してマイナスでないようにしたいとお話もあった。

相談結果としては、家族からの情報を基に、ことばの発達段階が事物の基礎概念（段階2）に入りつつあるという評価を伝えた。物を使ったコミュニケーションを身につけるために、事物の操作（物をそのものらしく扱うこと）の経験を積むことを助言した。ただし、入退院を繰り返しており、過敏が強いことから、慣れるために関わりを丁寧にすることや、状況の変化に対する怯えなどの心理的ハードルを考慮し、関わるのが大切であることも伝えた。過敏については、過敏が残っている場合と、過去の経験による拒否感が残っている場合の見分けがつきにくいことがあるが、本児の場合は家族からの情報を基に考えると、過敏はとれてきている可能性があることを伝えた。また、本児は他者からの関わりへの構えが強い上にできることが少ない。嫌がるまで繰り返す関わりが多くなるので、嫌がる前に終わるよう助言した。こどもが楽しい気持ち

で終わる経験を積むことで、自分の周りの世界への安心感を持てるようになる。まずは、信頼感、安定感の実感が大事ということが確認された。日常場面で、本人のペースに合わせた見守りや、両親がおもちゃを楽しそうに使ってみせること、可能なお手伝いさせてみるなど、実感ある体験を積むことを提案した。「STを受けたいが混んでいる」ことについては、PTやOTなどで現在行っている、運動や姿勢面、操作面への働きかけが、上記の関わりのペース作りになっていることを助言した。

助言のポイントは、1) 信頼感、安定感の実感を増やせるように、楽しくしている場面を見せること、一緒に行うことが大切で、2) ことばのペース作りを優先し、現行の療育を継続していくことであった。

またこのような一時的な1回限りの相談では、継続的に相談・療育している地域の医療・療育機関との関係に配慮が必要である。相談者Cに対しては、今までに保護者が得ている情報を整理し、全体的な療育の位置づけと意義をまとめて示すことにより保護者が子どもの全体像を把握できるよう支援し、それに基づき現在の療育が適切なことをフィードバックした。その結果、保護者は相談内容に満足するとともに、現在の療育への評価を高め安心して療育を継続する意欲を持つことができた。

(2) 相談会のアンケート結果

相談会終了後、満足度についてアンケートを実施し、回収率は100% (3/3) だった。

相談者全員が「とても満足」を選択した(表2)。相談者Cからはさらに、「障害について体系的にお聞きできたので全体的に理解できました。また同じような相談会をしていただきたいと思います。」という意見があった。

表2 相談会アンケート結果

	項目	満足度
満足したか	とても満足	100%
よかった点	役立つ情報が得られた	100%
	日ごろの生活や活動に役立った	100%
	抱えていた問題・不安の解消につながった	100%

(3) 相談会のまとめ

相談会では福島県在住の3人の言語発達障害児者について、以下の内容の相談があった。

- 1) 施設職員から、肢体不自由の成人の方との日常のコミュニケーション手段と効率的なパソコン入力についての相談
- 2) 家族に加え施設職員が同席し、自閉症幼児の他害への対応と場面の切り替えについての相談
- 3) 家族から、精神遅滞の幼児について「ことばを話すか?」という子どもの状態像や予後全般についての相談

今回の相談会では、相談対象者は幼児から成人にわたり、また相談内容も幅広いものだった。また、相談者も家族、療育機関職員、施設職員であり、幅広いコミュニケーションパートナーを対象にすることができた。相談会と事後のアンケートから、相談と助言により抱えていた問題・不安の解消につながり、相談会は日ごろのコミュニケーションの取り方や生活に役立つことが示された。また一時的な外部の専門家があたる相談は、継続的に相談・療育している地域の医療・療育機関との関係を考慮して行うことにより効果的に実施することができる。

相談会もまた本事業の「言語発達障害児者と適切なコミュニケーションを取ることができるようになるために、支援者に対して情報提供する」という目的に合致する成果をあげたと言える。アンケートの記述では、今後の相談会継続を望む声があり、相談会の継続開催を検討したい。

5

成果等のまとめと今後の課題

2013年度、私たち特定非営利活動法人言語発達障害研究会では、独立行政法人福祉医療機構社会福祉振興助成事業の助成を受け、コミュニケーションパートナーの実態をアンケート調査し、「コミュニケーションパートナー育成支援セミナー」を開催した。

2013年11月～12月にかけて実施した実態調査（「放課後等デイサービス・放課後支援を含む余暇支援、移動支援、レスパイトケアにおけるコミュニケーションに関する実態調査」）では全国の放課後等デイサービス事業所や学校などから317通の回答を得た。その結果では、言語発達障害児者に日々接している支援者は個々の児者の特性に合わせた対応を工夫し、研修会に参加するなど研鑽を積んでいた。しかし、不適切な行動を繰り返す子どもや、意思疎通がはかりにくい子ども、受け身な子どもなどに、どのように対応してよいか困っており、子どもの意図を正確に把握できているか不安に思っていることがわかった。

このようなコミュニケーションパートナーの方々のニーズを受けて、2014年1月には福島県において「コミュニケーションパートナー育成支援セミナー」を開催し、176名の参加をみた。言語発達障害児者に適したコミュニケーションの取り方に関して、基本的な考え方に加えて豊富な具体例を交えた講演会は大いに好評であった。個別対応の相談会でも全員から不安の解消につながったとの感想が得られた。

実態調査と福島でのセミナーの結果、以下の課題が明らかとなった。(a) 言語発達障害との関わり方などについて日頃から工夫しているが、対応に困る場合が多いこと、(b) 研修は一定程度受けているが、障害やコミュニケーションに関する基礎的な内容から日頃の関わり方まで研修に対するニーズは依然として非常に高く広範囲であった。1月のセミナーでも研修会を今後も続けて欲しいという要望があった。(c) 近年、放課後等デイサービスのスタッフやガイドヘルパーなど言語発達障害児者に関わるスタッフは増大している。また家庭や学校以外で過ごす場面も多様となっている。その中で「職員がみな違うコミュニケーションをとることがあり、どの方法がよいのかと疑問に思う。利用者も不安になるのではないかと思う（行政職員）」という意見にみられるように、スタッフや家族が情報を共有し一致した方法で対応することは大いに重要である。

これらの課題に対し、研修会・セミナーの継続に加えて、具体的な日常場面に即し、また個々の障害特性や状態にあった適切なコミュニケーションの取り方をまとめたハンドブックを作成・配付し全国のコミュニケーションパートナーを支援する手立てとすることが今後望まれる活動であるといえる。

コミュニケーションパートナーであるスタッフや家族が困っていることを少しでも解消することは私たちの目標の1つである。しかし、言語発達障害児者が予告や指示を理解し活動できるように支援することは、ともすれば指示に従うよう行動を制御するといった大人の側の利便性に陥るリスクがある。実態調査にも「まわりの大人が、指示や行動障害の制止をメインとした支援の視点しかもっていないと、コミュニケーションもその手段としか捉えられなくなってしまう（放課後支援）」という記載がみられた。このようなリスクを避け、さらに言語発達障害児者とコミュニケーションパートナーが対等で「楽しくコミュニケーションできる」ことを大切にするにより、言語発達障害児者のコミュニケーションの質・生活の質(QOL)を向上させることができると考える。言語聴覚障害児者との真のコミュニケーションパートナーシップの実現をめざして、今後ともコミュニケーションパートナーを育成し支援する活動の継続が求められている。

謝辞：調査に協力いただいた言語発達障害研究会会員および児童発達支援関連事業所、特別支援学校をはじめとした学校職員の方々に感謝いたします。またセミナーの実施にあたり全面的にご協力いただいた福島県言語聴覚士会会員のみなさま、ならびに会場を利用させていただいた総合南東北病院に厚く御礼申し上げます。

また福島県、郡山市、郡山市教育委員会からはセミナーへの後援をいただきました。コミュニケーションパートナーへの支援を通じて、東日本大震災からの復興に少しでも寄与できれば幸いです。

資料：アンケート調査原紙・セミナーチラシ

コミュニケーションパートナーの方への質問紙

この質問紙は、発達障害のある人の日常におけるコミュニケーションの様子について把握することで、より豊かで意味のあるコミュニケーションを広げていくことを目的としたものです。

貴所サービス利用者について、あてはまると思う項目に印をつけてください(複数の利用者について、複数回答していただいて結構です)。ご記入が終わりましたら、返信用封筒にて 12月28日(土) までにご投函くださいますようお願いいたします。

記入者のご所属；放課後支援，児童発達支援事業，放課後等デイサービス，一時預かり

ガイドヘルパー，居宅介護，学校，その他（ ）

記入者の事業所の都道府県； _____ (都道府県)

記入者の経験年数； _____ 年 (今のお仕事)， _____ 年 (福祉など関連するお仕事の通算)

記入者が支援している対象者の人数 約 _____ 人 記入日：2013年 _____ 月 _____ 日

1. 利用者からの、よくある要求にはどんなことがありますか？

- | | |
|--|---|
| <input type="checkbox"/> トイレに行くこと | <input type="checkbox"/> 遊んでもらうこと |
| <input type="checkbox"/> 飲み物を飲むこと | <input type="checkbox"/> 食べ物を食べること |
| <input type="checkbox"/> どこかに行く (移動する) こと | <input type="checkbox"/> 寝ること |
| <input type="checkbox"/> 届かないところにあるおもちゃをとること | <input type="checkbox"/> 動かないおもちゃや開かない袋を開けること |
| <input type="checkbox"/> 絵本の読み聞かせをしてもらうこと | <input type="checkbox"/> ビデオ・DVD を見る |
| <input type="checkbox"/> 音楽 (CD など) を聞くこと | <input type="checkbox"/> ファミコンゲームをすること |
| <input type="checkbox"/> パソコンをすること | <input type="checkbox"/> 周りの人にかまってもらうこと |
| <input type="checkbox"/> 予定の確認 | <input type="checkbox"/> 「〇〇と言ってほしい」という要求 |
| <input type="checkbox"/> その他，具体例をお書きください | |
| (_____) | |

2. 利用者からの要求にはどのような方法がありますか？

- | | |
|---|---|
| <input type="checkbox"/> 泣く | <input type="checkbox"/> 怒る |
| <input type="checkbox"/> 手をひっぱって連れていく | <input type="checkbox"/> 欲しいそぶりをする |
| <input type="checkbox"/> 身ぶりをする (ちょうだいなど) | <input type="checkbox"/> 指さしをする |
| <input type="checkbox"/> 実物 (お皿・お菓子の袋など) をもってくる | <input type="checkbox"/> 絵や写真を持ってくる・指さす |
| <input type="checkbox"/> 文字を指さす | <input type="checkbox"/> 発声する |
| <input type="checkbox"/> ことばで言う | |
| <input type="checkbox"/> その他，具体例をお書きください | |
| (_____) | |

3. 利用児者は、報告をどのように行いますか？（報告とは、一緒に外を歩いている時などに、興味のあるものを見つけた時や何かが完成した時に、「～だよ」と教えてくれる身ぶりや言葉を指します。例：散歩中に車を見つけると、本人が指をさして一緒にいる人に教える）

- | | |
|--|---|
| <input type="checkbox"/> 報告をしない | <input type="checkbox"/> 物を持ってきて見せる |
| <input type="checkbox"/> 顔を見る | <input type="checkbox"/> 指さしをする |
| <input type="checkbox"/> 身ぶりをする | <input type="checkbox"/> 絵や写真を持ってくる・指さす |
| <input type="checkbox"/> 文字を指さす | <input type="checkbox"/> ことばで言う |
| <input type="checkbox"/> その他、具体例をお書きください | |

()

4. 利用児者は、どんなことについて報告をしますか？ 特に報告をすることの多いものには◎をつけてください。（3. で「報告をしない」に記入された場合は、無記入で結構です。）

- | | | | |
|--|-------------------------------|----------------------------------|---|
| <input type="checkbox"/> 車 | <input type="checkbox"/> 電車 | <input type="checkbox"/> 動物 | <input type="checkbox"/> その他の生物（虫、恐竜、魚） |
| <input type="checkbox"/> 積み木 | <input type="checkbox"/> パズル | <input type="checkbox"/> 絵本 | <input type="checkbox"/> 文字 |
| <input type="checkbox"/> 数字 | <input type="checkbox"/> マーク | <input type="checkbox"/> アルファベット | <input type="checkbox"/> テレビのキャラクター |
| <input type="checkbox"/> テレビ番組 | <input type="checkbox"/> アイドル | <input type="checkbox"/> 人 | |
| <input type="checkbox"/> 過去の出来事について（その日にあったことなど） | | | |
| <input type="checkbox"/> その他、具体例をお書きください | | | |

()

5. その他、利用児者からは、どのようなコミュニケーションがみられますか？

- 他の人の注意を引くために以下の行動をする
- | | |
|---|--|
| <input type="checkbox"/> 服などをひっぱる | <input type="checkbox"/> 叩く |
| <input type="checkbox"/> 発声をする | <input type="checkbox"/> 名前を呼ぶ |
| <input type="checkbox"/> 「ねえねえ」などと声をかける | <input type="checkbox"/> 怒られることをする（物を投げる等） |

質問

その他 ()

6. 利用児者に対し、予定や指示を伝える時にどのようにしていますか？

- ことばで伝える 身ぶりで伝える
絵や写真で伝える 文字で伝える
その他、具体例をお書きください (

)

絵や写真で伝える場合、その絵や写真はどなたが準備をしていますか？

- 保護者が準備をする スタッフが準備をする 学校が準備する
その他 (

)

7. コミュニケーションで困っている状況はどんなことですか？

- 発音が不明瞭で周囲が理解できない
発語があるが、スタッフからの質問に答えない。または質問を復唱するなど答えが不明
発語がなく、本人の意思確認が難しい、できない
要求が乏しい、受身、あきらめてしまう
サインを使わせたいがうまくいかない
スタッフの指示が伝わらない
予定の変更等を伝えるが、理解できず怒ってしまう
いらいらしている、やりたくない時、対応が難しい
勝手に（トイレなどに）行ってしまう
動かない
集団行動ができない
その他 (

)

8. 利用児者とのコミュニケーションで工夫していることを教えてください。

9. 困ったときにだれに相談していますか？

- 職場の上司・責任者 職場の先輩 職場の同僚
職場外の関係者（例：相談員，ソーシャルワーカー，ケアマネジャー，その他 ）
利用児者の家族
その他（ ）

10. あなたの障害に関する研修歴と、研修の必要性についての貴方の考えを教えてください。

- ・研修歴について （なし・学生時・資格取得時・職場研修・自主研修）
- ・自閉症・知的障害・脳性麻痺などについて 必要性（高い・中・低い）
- ・言語の発達について 必要性（高い・中・低い）
- ・コミュニケーションについて 必要性（高い・中・低い）
- ・サイン，シンボル，コミュニケーションボードについて 必要性（高い・中・低い）
- ・その他必要と思われる研修を教えてください。（ ）

11. 発達障害のある人とのコミュニケーションについて、日頃感じていることを自由にお書きください。

ご協力ありがとうございました。

お問い合わせ先：

〒292-0825 千葉県木更津市畑沢 2-36-3 特定非営利活動法人言語発達障害研究会
メールアドレス：info@lipss.jp

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業
コミュニケーションパートナー育成支援セミナー in 福島



放課後や休日の コミュニケーションを 豊かにするために

2014年
1月19日 日

講演会 10:30 ~ 14:15
相談会 14:30 ~ 15:30

参加費
無料

知的障害、発達障害、脳性まひなど言語発達障害のある児者の社会参加を支えるレスパイトサービス、放課後余暇活動、ガイドヘルパー等は全国的に広がっています。しかし、言語発達障害児者に適したコミュニケーションの取り方や予告の仕方、パニック時の対応などができるスタッフの養成は不十分な現状です。

そこで私たちは、言語発達障害児者の日常生活への支援に携わる方々を「コミュニケーションパートナー」と位置づけ、言語発達障害児者と家族とスタッフが、相互に適切なコミュニケーションを取ることができるように昨年度東京でセミナーを開催しました。今年度は福島県郡山市で、講演会と相談会を実施します。障害特性に即した適切なコミュニケーションの取り方、家族からスタッフに伝えるための方法などについて事例を交えてお話しします。

会場

一般社団法人脳神経疾患研究所附属 総合南東北病院 NABEホール

福島県郡山市八山田7-115 ☎024-934-5322 交通アクセス <http://www.minamitohoku.or.jp/access/access.html>

福島交通バス：郡山駅前発（郡山駅からバスで15分、バス停）

(1) 新国道経由 日和田・フェスタ行…勝木沢・南東北病院前下車 (2) 八山田循環…勝木沢・南東北病院前下車

主催 NPO 法人言語発達障害研究会

申込方法 裏面をごらんください。

後援 福島県、郡山市、郡山市教育委員会
福島県言語聴覚士会

講演会と相談会は申込方法が異なります。
お間違えないようにご注意ください。
託児はありません。

講演会

定員 200名

10:00 …… 受付開始

10:30~11:30 「発達障害児とのコミュニケーション - 発達段階を踏まえて -」
東北文化学園大学 倉井成子

12:30~13:15 「自閉症スペクトラムの人とのコミュニケーション」
よこはま港南地域療育センター 梶縄広輝

13:15~14:00 「肢体不自由児とのコミュニケーション - 道具と工夫 -」
千葉県千葉リハビリテーションセンター 知念洋美

14:00~14:15 …… 質疑応答

対象 放課後等デイサービス・放課後支援を含む余暇支援、移動支援、レスパイトケアに携わるスタッフ、言語発達障害児者のご家族、言語聴覚士、幼稚園・学校教諭、保育士、保健師、その他一般の方々

相談会

完全予約制

14:30~15:30 保護者ならびに専門家・支援者向け相談会（事前申し込み、若干名）

対象 ご家族、支援にあたるコミュニケーションパートナーの方や言語聴覚士などの専門家・支援者

～相談会について～

ことばの発達に障害のあるお子さんに関して「保護者ならびに専門家・支援者向け相談会」を開催します。
当研究会および福島県言語聴覚士会会員の言語聴覚士が、日常のコミュニケーションや言語発達について個別の相談をお受けします。

※ 今回の相談は、お子さまへの検査等を行うものではなく、ご相談に応じるものです。お子さまは同伴なさらないでください。

お問合せ：NPO法人言語発達障害研究会事務局 〒292-0825 千葉県木更津市畑沢2-36-3 TEL&FAX：0438-30-2331 E-mail：info@lipss.jp

言語発達障害研究会

言語発達障害研究会は1984年から活動を開始し、定例会や各種講習会、検査法や療育・訓練プログラム開発など幅広い活動を行ってきました。言語・コミュニケーション障がいのある方やご家族などへの支援を行う言語聴覚士、指導員や保育士などの児童福祉施設職員、特別支援教育に携わる教諭など専門家からなる組織です。2008年5月に特定非営利活動(NPO)法人を設立しました。2009～2011年度は障害のある子どもの家族の方に直接に講演や相談に応じる「家族支援セミナー」を開催、2012年度からはコミュニケーションパートナー育成のためのセミナーを開催し、多くの方にご参加いただいています。

講演会 申込方法

● オンライン申込

言語発達障害研究会のホームページ (<http://lipss.jp/>) の支援セミナーのページ「講演会のお申し込み」から必要事項を記入して送信してください。

● 携帯電話

右のQRコードからアクセスし、お申込みください。

● 郵送またはFAX

下記に必要項目を記入し、事務局宛にお送りください。

(送付先: 〒292-0825 千葉県木更津市畑沢 2-36-3 言語発達研究会事務所 宛 / FAX: 0438-30-2331)



【締め切り】……2014年1月6日(月)

※ 定員を超えご参加いただけない場合のみ、ご連絡いたします。

定員になり次第、受付を終了します。定員に空きがある場合のみ、当日受付も可能です。

当日受付が可能かについてはホームページの支援セミナーのページ (<http://lipss.jp/>) でご確認の上ご参加ください。

相談会 申込方法

● オンライン申込

言語発達障害研究会のホームページ (<http://lipss.jp/>) の支援セミナーのページ「相談会のお申し込み」から必要事項を記入して送信してください。完全予約制です。

定員になり次第、受付を終了します。申込をお受けした方には、のちほど調査票をお送りいたします。

● 携帯電話

右のQRコードからアクセスし、お申込みください。



申込書

氏名 _____

連絡先 メールアドレス _____

電話番号 _____

◆以下の該当するものに○をつけてください。

- レスパイトサービス・放課後余暇活動支援職員 外出を支援するガイドヘルパー 保護者・ご家族
 言語聴覚士 特別支援学校・学級の教諭(言語治療教室含む) 通園施設の指導員・保育士・幼稚園教諭
 保健師 その他 (_____)

◆本セミナーについて、何で知りましたか？

- 言語発達障害研究会の (ホームページ 案内メール DM のチラシ)
当会以外の団体 (_____) の (ホームページやブログ メールリスト twitter や Facebook)
 施設や学校の掲示 知り合いから聞いた 言語聴覚士から聞いた
 その他 (_____)

※ お申込みいただいた個人情報、本セミナーに関する事項および今後のご案内以外に使用いたしません。

独立行政法人福祉医療機構 社会福祉振興助成事業
2013年度コミュニケーションパートナー育成支援事業報告書

2014年3月20日発行

発行所 NPO法人言語発達障害研究会

事務所 〒292-0825 千葉県木更津市畑沢2-36-3

Tel. & Fax. 0438-30-2331

<http://lipss.jp/index.html>

